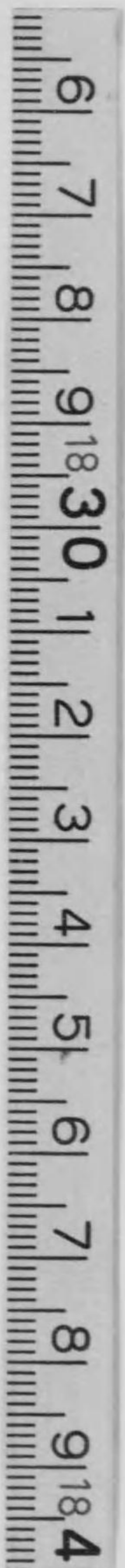


264
44



始





師範生の頃
校長のころ

安部清見 著

岡本偉業館發行

訓導の指揮に満足し得ない師範教生諸君に捧ぐ
女房役になり得ない次席訓導の方に捧ぐ
お上手一ツ言ひ得ない田園小學校長各位に捧ぐ
主事に厭がられる師範附屬訓導諸氏に捧ぐ
憂のない一人はらの小都市小學校長諸賢に捧ぐ

大正
13.9.9
内交

正 誤 表

頁行	誤	正	頁行	誤	正	頁行	誤	正
二三	鍍金生活は	鍍金生活は	二〇一	模倣と創造	模倣と創造	二五二	以上ものに	以上のものに
二九	労働によつて	労働によつて	二〇二	行詰りつたとき	行き詰つたとき	二五三	なければならぬ	なければならぬ
三六	教育の直髓だ	教育の眞髓だ	二〇三	七身体上變化は	身体上の變化は	二五四	ならぬ	ならぬ
三九	教育者は	教育者は	二〇四	八勞せらるゝ場合	慰せらるゝ場合	二五五	であるられば	であらねば
四〇	教育は	教育は	二〇五	九爲めになつては	爲めであつては	二五六	厭厭するに	嫌厭するに
四一	否にかよつて	否にかよつて	二〇六	九事にな事になる	事になる	二五七	第一、方法論	第三、方法論
四二	兄は頭をボカン	兄は頭をボカン	二〇七	九末永却	末永却	二五八	上げばならぬ	上げればならぬ
四三	許容である	許容である	二〇八	九衰微	衰微	二五九	六になされてゐる	にされてゐた
四四	言はずとも知れ	言はずとも知れ	二〇九	九掲げたい	掲げたい	二六〇	いふ事では	いふ事では
四五	周旋料	周旋料	二一〇	九偶話修養談に	偶話が修養談に	二六一	究屈窮屈	あるたびに
四六	全部であつた	全部であつた	二一一	九その婆さんも	その婆さんも	二六二	この普通に	この普通に
四七	理解がなければ	理解がなければ	二一二	九彼の生んで	彼を生んで	二六三	受け容れる	受け容れる
四八	生理學や	生理學や	二一三	九概念の傳	概念を傳	二六四	一過程と考へて	一過程と考へて
四九	主義に種々	主義に種々	二一四	九偉力あに満つ	偉力に満つ	二六五	七困難な事を	困難な事も
五〇	然らざるもの	然らざるもの	二一五	九ありあります	ありあります	二六六	七固定を免れ	固定を免れ
五一	講議して	講議して	二一六	九微弱に傾いた	微弱に傾いた	二六七	である	事である
五二	而しての結果	而しての結果	二一七	九顔へ傳つて	顔へ傳つて			
五三	障礙や	障礙や	二一八	九加護の機會	看護の機會			

はしがき

彼は、つまらぬ男である。月給五圓の代用教員を振り出しに、准教員、師範教生、田園小學校次席訓導、おなじく校長、師範附屬首席訓導を経て、今は、都市とは言ひながら、再び元の小學校長にあともごりしてゐる。それが彼の生活である。その間十八年。

彼は、つまらぬ男である。あまり憂き世の荒波にも、もまれないで過して來た。吹きまく嵐のたゞ中へ飛び込んで眞珠を探らうともしない。それを避けようと努力した事もない。あまり辛い事、苦しい事を知らずに、平々凡々と、トコロテン式に、その日を送つてきた。それが彼の生活である。その間十八年。

彼は、つまらぬ男である。世の中は「つる」の全盛である。之にかちりついてゐないでは、逆も、視學にも、郡長にも、代議士にも、なれないのが常道である。彼は、それを知りながらも、誰れにも、たよらうとはしない偏屈である。何處までも、獨立獨歩である。野中の一本杉である。飛ばす鳴かず、平々凡々と歡喜してゐる。それが彼の生活である。その間十八年。

彼は、つまらぬ男である。つまらない自然性の彼を、つまつてはならぬと理性の彼が、始終鞭うつた。彼には、彼を超越したむしろ抱擁した彼が、影となり陽となつてつきまとつてゐた。彼に使つてゐた。彼は彼の満足するのを見て歡喜した法悦した。

茲にまとめたものは、十八年間の生活中に、彼から彼へ贈つた甦生狀であり、

鐵槌録である。今頃讀み返して感興を惹いたものゝみを集めたものである。

彼は、つまらぬ男である。だから思想も纏つてゐない。文も拙い。笑はずにはゐられない。

しかも、その時その時の十八年間の進展録。思想の異つた方面、深淺、發表の形式の多種多様、それは止むを得ない。

ただ全思想の奥底には、たしかに、貫かれた一條のつなのあることゝ、思想の更新して行つた跡が見られる。彼は、それだけで満足する。

彼は、つまらぬ男である。つまらぬ彼が書いた本書は、またつまらぬものであるのが當然である。

でも、彼の體驗であり、清涼劑である限り、彼に取つては、唯一に貴いもので

はしがき
ある。

けれ共、彼以外の讀んで下さる方には、さほど價值のあるものとは思へない。もし全文の奥底にひそめる、彼の個性、彼にのみたよつて人にたよらず、彼の命令に従つて自らを律して行く處に、共鳴して下さる方があるならば、それは、彼にとつて、望外の光榮である。

若葉の榮ゆる頃

渭北の寓居にて

清 翠 生 するす

師範生の頃から
校長のころまで
彼から彼へ

目 次

師範生のころ

一、成長への教育と殺人教育……………三

親切の不親切となりし話。——殺人教育の聲。——外部から加へてならぬ。——
教育は蟹さんの態度。——子供の足に合して靴を造れ。

一、兒童を伸ばせ……………六

一年はおこなしい。——訓辭のない指導。——こどもは遅刻する。——親の恩を
眞に感じさす事は難かしい。——こどもは過をかくす。——他人の忠告。——之
でよからうか。

一、彼は内長植物たれ……………一〇

汝の過失一個を發見せよ。——他人の目糞はよく見ゆる。——早く出直せ。——

目 次

目次

二

- 一、新しき教師生活に入る彼に……………三
鍍金生活はよせ。
鞭うたんとする。——彼よ行け。——根柢ある自己の啓培擴充。——第一義の智識を收得せよ。——眞の人間となれ。

學小 次席訓導のころ

- 一、彼の境遇は彼自ら創れ……………二七
書籍は一種の滋養物。——自己によつて自己を創る人へのみ有効。——教育するとは自己開拓することだ。——教育徹底への努力。——教へ上手よりも學び上手。——人間の特權。——彼の娘に學べ。
- 一、体験せよ……………三〇
彼の貧弱さを感じよ。——書籍にのみかぢりつくな。——戀に憊んだ事なのにも何の理解があらう。——苦惱の中へさびこめ。——人間通となれ。
- 一、かゝる模範生を葬れ……………三四

- 一、教師としての靈的生活……………四一
禁欲生活は誤つた靈的生活。——自然性はぬきにできない。——慾望の統制。
- 一、彼の結婚の目標……………四五
結婚は趣味の一致か性慾の満足か。——結婚は完全なる人間の表現を爲さんため。——結婚は子孫の繁殖をはかるため。——得たいと思ふ對者。——子なきものは去るか。

- 一、生命の躍動……………五一
完成した人間があるか。——完成は躍動の停止。——教師として持つべきもの。——活きた人格者。——向上への努力。——對者の人格を引きあぐる方法。——子供を教育する權利あるか。——生命の躍動の持主。

- 一、母は永遠の生命の創造者……………五七
潜在的能力。——環境によつて學習づけられる。——運命の基調。——生涯の

目次

三

目次

背景。——母親の感化。——永遠の生命の彫刻。——總ての眼をひく北極星。——文化人の創造者。

一、純真な子供を知れ

蟬の聲にさびだす。——兄は頭をボカン。——繪本をジャキ〜。——カバンを投げ出す。——不従順な子供の製造法。——子供は慾望の權化だ。——蜜柑の分配は大問題。

六〇

一、彼はかゝる思索の元に結婚の媒介に努めた

家庭教育改造の出発點。——從來の媒介の缺陷。——教育者は相談相手。——當事者の人格を發見すること。——創造的人格者を見出すこと。——人格を披瀝する事。——慎重の態度を採ること。——常に青年男女の相談役となること。——むすび。

六四

田 小學校長のころ

一、校長十年案

理解は友白髪の後。——教育は人格の渾一抱擁。——一年二年での轉任。——

八一

一、この頃の青年に

細心と小心。——獨立と孤立。——模倣と創造。

九五

一、彼が死生の境に湧いた宗教觀

◆信仰生活

目に見えない實在に對しての歸依。——科學の上のみ眞があるのでは心細い。——科學が解してゐるのは何百万分の一だ。——無限の空に大なる神秘を認め。——彼自身の中にも大なる神秘のあることを信ずる。

九八

◆祈禱生活

小我をすて、大我に絶對歸依する。——祈禱の精神を知らぬ人は薄倖の人。——超我の力によつて科學以上に伸展する。——祈禱は強迫であつてはならぬ。

◆日常の宗教生活

目次

超經驗の世界と交渉しつゝ活動することだ。——無一雜念となれ。

◆無限の愛

柔の花に神の無限の愛を認める。——日常の經驗にも神の愛を發見する。——死線の上に彷徨するとき特に明確となる。——死の恐怖に襲はれず全快した。

一、傳波録 (一) 一〇六

研究心の深いH先生に。——身体のために体育に努力せんとするS先生に。——煩悶せるB女先生に。

一、家庭教育の改造 一二五

教育改造の聲。——家庭教育の行詰まり。——教師は先引き家庭は後押し。——竹の柱にかやの屋根。——室の空氣が問題。——子供は家庭の花。——美の表現者が萎縮する所以。——家庭は知識の注入場。——教師は學校教師ばかりでない。——母の自覺。——母の眞實の愛の理解。——先天的能力の見解。——心理學生理學の知識。——家庭生活の特徴發揮。

一、親の爲か。子の爲か 一三四

親中心主義。——親は絶対權を持つてゐない。——親自身の將來の保証ではない。——向上發展への祝福。——子女中心主義。——天稟を發揮せしめよ。

一、萌へ出でよ女教師 一三七

女教師の位置の向上。——女教師の自覺促進。——自己の生活の意義を思索せよ。——「女教師はその日暮しだ」の暴言。——渾身の力を顯はせ。——仕事を通じて自己の成長をはかれ。——思想の自由をゆるせ。——二重生活の撤廢をはかれ。——自分の力で自分を築け。——教育の大部分を女教師に。

一、傳波録 (二) 一四六

彼が書いたものに批評して呉れたS先生へ。——人間味に生きてゐるA教育團の各位へ。——新しく校長となつた才一先生へ。

師範 首席訓導のころ

一、眞實の精神生活のための物質的要求 一五六

教育者は清貧に安んずべきか。——眞の物質的要求は、眞の精神生活のために當

然だ。——今日の教育者の生活は下級生活である。——活眼を開いて教育者の最後を見よ。——天より相當の報酬は授與される。——考究すべき方案。

一、私に輝いた師範校長

一七六

積善の家に餘慶あり。——美は自己の表現に始まり自己の表現に終る。——同情と愛を以て唯一の贈物とするは詩人の特權なり。——愛は一切を美化し靈化して活動の源泉を與ふ。——偉人は成效する程恐怖する。——養生即修養は偉人の軌道なり。

一、所謂新しき婦人に

一九〇

女性の上に立つた本氣の運動。——夫を捨てて子をすて、樂隊代り。——千人の所謂新しい婦人よりも。——獨自的人生觀に生きよ。——自己の生活を通じての改造運動。——社會の罪、男の罪、女の無自覺。——女性の特權を發揮。

一、高銚ゆき

一九七

懐かしや高銚ゆき。——惠まれた自轉車。——櫻の花が綻びさうな上天氣。——慰められた白梅。——憧れた大自然。——嘗つて飴湯に湯を慰やした中角堤。——眞實の表現のN先生。——人間としての渦卷の展開。——温い姿なく老杉昔

を偲ぶ。——生々した櫛が供へられてある父の墓前。——人間味に生きてゐる爺さん。——實際的教育學を聞かされた長尾令夫人。——導かれた鷺。——恩師丸岡先生。——眞實の表現。——滿をつくした會合。——かえり。

一、恩師へ奉る書

二二三

眞の教育者は眞實の表現者である。——眞の教育者は靈的偉力あり。——眞の教育者は情熱と無言に生きればならぬ。

一、愛兒不二子の臨終まで

二二九

刹那の神秘。——「特」を書いた音信。——神ならぬ身。——直覺的の希望。——既に發車。——劍の峰をふむ如き不二子の容態。——命は天、加護は神佛。——不二子の苦悶、父の祈禱。——死の宣告。——從弟の應援。——愈危険狀態。——元旦の闇黒。——こうなつては到底絶望。——嘗つてなかりし一日の喜悅。——永遠の愚別。——赤き愚痴。——感謝と満足。

一、血を吐く來翰

二四一

泌々愛嬢不二子さんを忍んで居ります。——私も子を棄てた人の氣分はわかります。——涙の潤れる迄泣きつくさなければ居られない男です。——「愛兒を

なくして人生観の上に大變動を起した。——痛切な經驗試練を経なければならぬと言ふ事せう。

一、生活我観

二四五

◆ 体験生活

人生の眞の理解は年の若い内には出来ない。——人生の理解は學問や知識だけでは用をなさぬ。——子供を捨てた人で始めて人の子を失ひしに共鳴する。

◆ 觀照生活

貴重なる神秘の開拓者でなければならぬ。——深き悲哀の人と深き歡喜の人は同一人である。

◆ 運命生活

運命の開拓者と同時に運命の被支配者。——困難、苦痛、悲劇、不遇は天の與ふる試験。——人生は惡戰苦闘である。——困難、不如意の運命に我れから突き入れ。——自ら自己の光明を把握し創造せよ。

◆ 道德生活

半ば神らしい、半ば禽獸らしい生活。——一大理念によつてやがては抱擁さるべ

きもの。——強烈なる慾望を鋭き理知の光で淨化する。——人間は苦しみを突破せればならぬ。——人生は意慾の理性化感情の淨化である。

一、新しき道德教育へ

二五七

◆ 根本問題

道德の第一義にふれてゐたか。

何のためにされてゐたか。——生活の力は與へられなかつた。——倫理學者や教育者の態度。——兒童の上に及ぼした影響。

眞の第一義の道德。

全人格の表現、生活の中心。——健全なる道德。——道德的生活。

人間の本性の善の創造へ。

人間の本性以外客觀的存在物。——道德の眞生命、内部、衷心、創造。——個人及團體の價値創造。

結果についての考察。

◆ 教材論

教科書

教科書に捉はれてゐた。——絶対價値は兒童の實際經驗。——間接經驗のものとして尊重。

教材について。

時勢の要求におかれてゐるものが多い。——實際生活さかけ離れてゐる。——教師の頭が古い。——例話は參考資料。——例話は靈感の喚起。——眞實の告白。——眞實の態度に導く方法。

◆方 法 論

注入より自學へ。——自覺創造にまで。——意欲本能の哲學化。——結果についての考察。

一、修身教授の御台覽を仰いで

濃厚なる感化と深刻なる教訓。——温顔を以て御會釋。——こまかき學習狀態の御台覽。——殊に御謹嚴なる御態度。——初等教育に對して特に御考慮。——御慈愛ある御退出のお會釋。——兒童の感激と吾人の覺悟。

一、赤き心をみ旗にこめて

コウタイシデンカチオムカヘシタコト。——皇太子殿下の奉迎。——名殘惜しい十一月廿九日。——畏き極。——御前授業の胸の中。——行啓前の八分間。——嬉しさ。——空は麗らかに。——歡喜にみちて。——畏くも有りがたき此光榮。

市都 小學校長のころ

一、温室的教育からの解放

自然から放さうとする。——「おさない」は「親の虚榮心」の満足。——「力がある」は別問題。——風邪をひいてもよいでせう。——代償を拂はればなりません。——温室的の人間を作ることに苦心。——庭園の開放、先づ第一。——まづ教室から追ひ出すことです。

一、麗らかな空

野中の一本杉。——天に吐くつげ。

一、人生の行き方に徹せよ

暑い時に暑いと言ふさへ不道德だ。——缺點を見せまいとするのが教師の努力。

——老練な教師とは「上塗、虚偽、外見」。——自亡自棄の人も眞の教師でない。
——眞の人に戦ひがあり、奮闘がある。——一過程を示すのが教師。——苦惱
を歡喜にかへるのが人生。——自己の眞實に生きよ。

一、ふりかかつて……

三二五

自己を遂行し得る人間に。——自己の眞實を告白し得る人間に。

一、紙屑籠……

三二六

惠まれた時に眞に人間に返る。——南方人の人情は自然の美から。——禮してく
れる児童を見直す。——温いか、冷たいか。——接觸するときの交感。——愛の
根柢に立つて。——鍍金道德はいやだ。——衝動に迫害を加へてゐるからだ。——
——死線を超越しない恨がある。——一としてのみ生命がある。——眞實な生活で
あるから悦ばしい。

一、丸薬ではない……

三三二

自己を他處にして。——理想の強迫。

一、彼は哲學に生きよ……

三四四

哲學研究者の種々。——一般の傾向。——人間一代研究しても分らない。——哲
學は一般に必要。——哲學は生活の根本の力。——哲學の學び方。

一、今日も曇る……

三四七

奥底に貴い力。——成長への努力。——環境への報謝。

一、生活に徹せよ……

三四八

自然の醇化生活。——規範の自律生活。——價値の創造生活。——徹底したる個
人生活と社會生活。

一、教育の標幟……

三四八

教育標幟

教育の綱領

自然の統制。——自律實現。——價値の創造。——環境への貢献。

彼と彼は、同一価値さはいへない。しかし、永久に對立して鎬をけづるものではなくて、融合渾一の一塊である。彼は彼によつて價值づけられ、又彼は彼によつて實現される。

彼から彼へは、彼から彼に與へた要求であり、彼を價值づけるための光明である。彼は、この要求光明を飽くまで實現せんとの服従であり努力である。

彼の本質に立つた内的強迫である以上、彼は歡喜してその價值に服従するものである。別の觀方にすれば、彼自身が立法者であり彼自身が實現者である限り、服従と言ふよりも自由と言ふ方が端的に直感される。要求光明は、自由實現に對してその機會を與へたものである。

彼は彼によつて自由實現をして來た。いまも變りはない。來るべき現世に於ても彼によつて彼の成長をはかつて行くであらう恐らく第四のあの世に於ても……………

師範生の頃から
校長のところまで
彼から彼へ

師範生のころ

◆成長への教育と殺人教育

彼は教育に對して幾何かの体験を得た。周囲を見るに、子供の爲めに可愛相でならない。涙を以て自己を深めしものがこれ。

彼は、彼が小學校の二年のとき學んだ讀本の中の「親切の不親切となりし話」と云ふ内容を想ひ出さずにはゐられなかつた。

或る處に大層同情心の強い少年があつた。その家に二羽の鶏が飼はれてあつた。その頃牝鶏は鳥屋の内に立て籠つて一向餌を採らうともしない。少年は不思議で堪らない。毎日様子を探つてゐた。母に尋ねると卵を温めるために、自分が餌をも採らずに努力してゐるのだと聞いた。

少年は早く雛の生れる事の好奇心と、一は牝鶏に對する同情心とで監視を續けてゐた。或日聞き馴れざる鳴き聲がする。さてはと鳥屋の中をのぞいて見ると牡鶏が騒がしさうに首さしのべて四邊を見てゐる。卵はと見れば、二つに割れかけて、中から可愛らしき鳴聲がする。少年は可愛相でたまらない。一時も早く出してやろうと、槌を以て殻を破り中から雛を出してやつた。雛は喜んで羽を擴げて一聲鳴いた。どうした譯か一二時間の内に次第に元氣が衰へて、とう／＼死んでしまつた。誠によい指導者である。彼れは、此少年に啓發さるゝ点が尠くない。

今日の教育は、この少年の愚を學んでゐる。なる程自我の向上は時日を要するけれ共外部から加へた自我は何等の効はない。却つて子供自身の自我を殺してしまふ。今日の教育を殺人教育と罵倒するのは茲である。

いくら急いでも割つてはならぬ。外部から手を加へてはならぬ。親切が厚けれ

ば厚い程じつと監視してゐる事だ。内から伸びて來るのを待つてゐる事だ。伸びられる様に援助する事だ。小利口に生れた人間は、時々誤つた事をする。

教育は猿蟹合戦の蟹さんの態度でよいのだ。「早く芽を出せ柿の木よ」。「早く大きくなれ柿の木よ」。「早く花咲け柿の木よ」。「早く實がなれ柿の木よ」。之だ。祈念するより外はない。之だ。大きくなるのは柿の木自身より外にない。外部から引き伸ばしてもだめだ。只蟹さんの教育者は柿の木の伸びるに都合がよい様に、中を耕し、肥料をやり、水をやり、害虫を除くのが天職だ。柿の木はかくあるべきものと定めて置いて、手入もせずして、茲まで伸びないからと言つて打てば、柿の木は滅亡するに決つてゐる。

靴は、「かくあるべし」として豫め作つて、子供にはかすものではない。子供の足に合して作つてやつて、ほんどのものが出来る。

児童を伸ばせ

教育もこの範囲より出でない。

明治三十九年一月上旬

附属教生室にて

◆ 児童を伸ばせ

(1) 一事はたどなしい

「附属の一年はおとなしい。二年は少しがざづく。三年はいたづらだ」。とは、時々訓導先生からのお話である。

之が眞の訓練であらうか。「一年は尤もいたづらで」二年三年と順次眞面目になるべき筈ではなからうか。

一年が尤もおとなしいことは、児童の自然性を俄かに殺して、学校と云ふ恐ろし

い型に入れて束縛したお蔭のものではあるまいか。

(2) 訓辭のない指導

妄りに席をはなれるな。雑談をすな。少し位の事に泣くな。他人の妨害をすな。不潔な處で遊ぶな。随分と澤山並べなさる。しかし児童を見ると、あくびばかりしてゐる。そして先生は、一度も室外で児童と遊んでゐるのを見ない。吾々教生ばかりである。

訓練は、自然の内に指導を見出してそれとなく刺戟する、暗示する、批判すること。即訓辭のない指導が尤も肝要であるまいか。

(3) 遅刻する

児童は朝寝する。遅刻する。集合にも時々遅れる。

児童を伸ばせ

それ等に對して、主事先生から大抵一日おき位に御訓辭がある。

随分厄介な事だと思ふ。何か一つだけ養つて置けば、凡てに通ずる様なものが欲しいものだ。事實について一々善惡を批評するよりも彼等の良心を目醒めさす方法を採つたらどうであらうか。そう甘くは行かないものだらうか。

(4) 親の恩を眞に感じさす事は難かしい

今日は、訓導先生の修身教授「親の恩」の處を見學した。眞に親の恩を感じさす事は難かしいものだと思つた。

理屈的に説いて行つては却つて反感を買ふ。効果が失はれる。教科書の事はアツサリと説くがよいかと思ふ。

そしてあとは、教師の實感を詳しく話すなり、他人の現在の例を話すなりして

不知不識の間に兒童の良心をめぐめさす。主觀へ主觀へといつの間にか目的地へ導いて行くのでなければ効果がない様に思はれてならぬ。

(5) 過をかくす

彼の教へた兒童の中に、過をかくしたものが二三人ある。朋友や父兄に強いられて斷りに來たものがある。良心に責められて苦しさのあまり斷つて來たものがある。中には詮議されて詮方なく白狀したものもある。

過は、自ら認識し、自ら判斷し、自らその處置を圖る様指導する事が肝要だと思ふ。

(6) 他人の忠告

友達に、姉に、兄に、教師に、父母に忠告される。之を單に禁示命令として盲從する

様訓練づけてはならぬ。自我を活躍さすべく資料を興へられたる者として、飽く迄自己肯定の態度に立たしめるがよい。自己によつて自己の善を創造さすがよい。

(7) 之でよからうか

いつも、「かくせよ」「かくすな」は望ましい事ではない。その代りに、「之でよからうか」。「之で満足するか」。「かうしたらどうだ」「この方がよい様に思ひはしないか」などにしたい。彼等に幾分でも多くの創造の餘地を興へてやりたい。

◆彼は内長植物たれ

彼が彼をうつ鞭は、何と言つても經驗我の勢力で理屈通りには行かない。
聊が出直す處。

[一]

「汝の隣人の過失を十個發見するよりも、汝自身の過失を一個發見せよ」とは不
斷彼を鞭つ黄金の杖である。

が併し「身についた糞は臭くない」。彼は我身を省みて戰慄を催す事が尠くない。

[二]

凡人の彼の眼の、形はカナリ大きい。いつも外にばかり向つて活動してゐる勢
か、他人の目糞は、とりわけ明瞭に見ゆる。之に反して、内へ内へと向いてゐな
い彼の眼は、彼の爪の垢さへも、ぼんやりとして見えない。

さうならされた彼は、自分の當然せなければならぬ責務まで棚へ上げてしま

ふ。そして何でも他人の領域に侵入してオセツカイをする。

〔三〕

コンナに引きずられて来た今の彼は、もう行き詰まつてゐる。只焦燥してゐるばかりだ。向上へのプロメトイスの火は消えさうだ。それでは新境涯は創造されない。早く出直せ。外長植物はよして内長植物へ。鑛金生活はよして自個擴充の成長へ。

明治三十九年二月下旬

附屬校教室の一隅にて

◆新しき教師生活に入る彼に

彼は明治廿八年の後半から翌年の三月まで教生として教育實習に勉めた。卒業四五日前に彼が彼を鞭うしもの

〔一〕むちうたんとする

櫻は笑ひ出した。土筆は頭をもたげて来た。天地の奥底に潜んだ靈の力で伸び出で生ひ立たんとして来た。

自然の力に圍繞せられてゐる人の心も亦、内在の力を發揚すべき時となつた。自然、人間の、凡てが大活躍を爲すべき時に當つて、彼は大理想を憧憬し生の發現に想到して、明るい歡喜に満ちてゐるであらう。大なる光榮と深き自惚の感が漲つてゐるのであらう。

教師生活——自己表現——自己開拓への、スタートを切らんとしてゐる。彼は彼に對して大呼鞭撻せなければならぬものがある。

〔二〕 彼よ 欠け

氣魄ある青年教師。彼れ。

希望多き青年教師。彼れ。

自覺せる青年教師。彼れ。

叩け。光榮と歡喜とを振り捨て、

眞と善と美と聖の奥底を。

掘れ。満心と自惚とを打ち捨て、

幽玄なる旅路と價值を。

行け。現在の自己を放棄して、

赤子となりて更に自己開拓を。

眞の價値は創造だ。

眞の生活は永遠だ。

〔三〕 根柢ある自己の啓培擴充

1

教育者は先づ偉大なる人間でなければならぬ。彼れ教育者も亦先づ人間にまで完成せねばならない。

偉大なる人間たらん爲めには、内部的に、廣き深き豊富なる内容を以て精神生活に努力する事が第一である。

この内部的、精神的、人格的生活は、常に思想的に、哲學的に、絶えず生活を向上させて行く事である。眞の衷心の要求に合致したる實現をする事によつて、仲

びて行く。眞の人間たり得る。従つて眞の教育者たり得る。

彼よ、先づ眼を轉じて今日一般が、果して自己の表現に飽くまで努力してゐるか否やを。眞に自己の生活が如何に貧弱なるか。空虚なるか。内容の不擴充なるか。如何に改善向上しつゝあるかを。恐らく彼よ。判然すまい。併し彼よ。單に環境に甘する勿れ。

2

「哲學とは皮肉の故郷なり」。「人は哲學的動物なり」とは、彼は、いまだ聞かずや。

眞實であり徹底である生活の價値と態度を示すものは哲學である。哲學を有せずして眞の人生なく、哲學の根據を離れての人間生活は存在の意義が失はれる。

人間は、その深淺は別問題としても一個の創造者であり、哲學者である。思想の凡て、生活の全部は、此哲學にまで歸り行くべきものである。

人生の意義、價値、目的は勿論、教育の目的も方法も、自己の修養も、凡てこの根柢より湧出すべきである。

教育者は、教育すべき直接の研鑽、修養、熟練は除く事は出来ない。けれ共夫等の根柢には間接的に哲學的崇高なる或物が蘊釀されてゐなければならぬ。客觀研究の外に主觀研究がなければならぬ。彼は之を持ち合してゐるや否。

3

彼の在學中即現在まで、哲學は「専門學者の遊戯」視せられてゐるではないか。けれ共時代は何時迄もそれを免さないであらう、師範學校の教科課程中に哲學

科を加へられるも近い内であらう。よし哲學科が新設されなくとも、倫理、教育、自然科學の學習は、必ずや哲學的思想の背景を以て解決する様になるであらう。其時代からの卒業生は幸福だ。

彼は不幸だ。と言つて茫然としてゐてはならぬ。

現今の物質文明の發達した時代の渦中に立つて、教育の大任を果さんとする彼は、猶更哲學する事を學ばねばならぬ。今や彼は哲學の微細なる萌芽を得てゐる。自己の奥底の哲學的胚珠を、一層擴充伸長せしめて、確固たる光明に生き、自我の要求に満足すべき人間とならなければならぬ。而して教育に當れ。之は容易の業ではない。畢生の努力だ。

〔二〕 第一義の知識を收得せよ

1

知識は、その知識を以て現代の文化を理解し、その文化の中に於て生活して始めて價值が生ずる。

眞の知識は、自己の表現を通して、始めて自己の所有物となる。價值が生れる單に概念として受容され收得されただけでは、人格に觸れない。生活の根蒂とならない。彼の四ケ年に得た知識は卒業證書を得る爲めのものではなかつたか。果して知識を生活して來たか。寄宿舎の中に籠城してゐて。

一体各個人が、人類の生活を體驗する事によつて、眞に自己に對して深き關係を持つものとの強き信念が得られる。其處に自己にとつて價值ある知識となる。

何等感官、筋肉を働かさずして——自己生活の表現なく、他人より受動的に受理したる知識は、學問としての体系中に重要な地位を占むるものであつても眞に我が有とはならない。自己に取つて價值のないものである。

彼の知識はこの第二義の知識——受動の概念知識ではないかと省みねばならぬ試験の前に頼いた殘糟であらう。彼は愈々貴き教育者となつて、人間の創造の子の前に立つのだ。その殘糟で何を積りだ。人の子を損ふ。それでは殺人教育者の惡名に討死するより外ない。勉めよや。努めよや。先づ殘糟を以て、偽らず欺かず、創造の子の前に展開せよ。絶えず外部に向つて發動、活躍せよ。失敗しては深究せよ。破壊されては建設せよ。かくして不斷の體驗を積み。それが第一義的知識收得の道だ。

往々彼は一冊の書籍を讀破すると、夫れ一冊全部の知識が收得された様考へてゐる。誤りだ。四ヶ年師範で學んだ書籍の全部は彼の知識として收得したと喜んでゐる。それは因襲的の試験と言ふものにのみ有効であつたものだ。教育者としての價值に、非常の増加を見るべきものではない。

若し彼が、第二義の知識に満足してゐるなれば、彼の教育は、兒童に徹底し得ない。のみならず、彼は當然人生の落伍者たらざるを得ない。

労働は學問知識を活躍さすべきものである。前に述べし如く知識は労働(感官活動、筋肉活動)によつて、價值づけられる。労働によつて眞に生きた知識となる。

ある事を眞劍の態度を以て實行することは、深甚の意味が含まれてゐる。而して徹底した時には或貴きものが獲得される。その時得たる知識は、その事以外の

生活の全般に力となつて顯はれる。

勞役に伴ふ知識。知識に伴ふ勞役。何れも人生の深所へ突入して、人間生活上に力強い活力が醸成される。眞に教育者としての力はかくして生れる。

今有してゐる彼の知識は第二義の知識であらう。彼はいよく自己開拓のために第一義の知識を獲んがために、體驗の學校に入學するのだ。ゆめ怠つてはならぬ。彼—。

〔三〕 眞の人間となれ

1

彼の第一に努むべきは、哲學する事である事を述べた。之は眞の人間に歸り行く道の根柢である。

彼は、四ヶ年一定の形式的、鑄型的、の教育を受けた。其間絶對に自己の獨自な点を發揮する事は免されなかつた。全く受身の姿で生き伸びて來た。

だから、一寸見の品性は出來たであらう。又、聰明な頭腦の持主であるかも知れない。けれ共、今日の複雑なる時代の趨勢に、眞に順應して、眞に自己を表現し得る人格者であるかごうか。彼は彼を疑ふ。到底四ヶ年寄宿舎に籠城してゐて何で人間が作られよう。永久の學究者を作るのならば彼多くは言はぬが。

一方社會の現状を窺ふ。世はどかく技巧の末にはしる。その根源を歿却してゐる。學校教育もその撰に洩れぬ。學校は知識の傳達所、職業の切賣所となつてしまつてゐる。眞の人間の生活する處、眞の人間の萌芽を作る處と言ふ事が棚へ上げられてしまつてゐる。目醒めねばならぬ。一般民衆も。殊に教育者は。新しき教師となる前に先づ茲に目醒めよ。先づ自ら人間となれ。而して兒童を導け。救へ

而して一般を喚び覺ませ。根柢にふれしめよ。

2

教育は、實に人格の接觸である。教師の全人格の抱擁によつて兒童は伸びて行く。教育者は、如何に教材を傳達すべきかよりも、自己を如何に開拓すべきかが先決問題である。如何にして眞の人間として表はれんかと自己を深く掘るべきが第一である。其處に凡ての教育の根柢が湧き出る。

彼は教育者となつて世に出づるや、環境は彼に迫るであらう。知識の切賣に、技巧の末に。花々しく動く事を。けれども彼の任務は、そこではない。要求を排斥せよ。

彼の天職は、徹頭徹尾自己開拓だ。そして眞の人間となる事だ。之より外ない。

何處までも急がず、燥がず、磐石心で現在の教育者の型——先生臭い型から脱して、眞の自己を成長させ。そこに自己の天職は遂行される。貴きは先づ眞の人間となる事である。

3

昔の師匠は、自己の内部に、大なる力と深き識見を養ひ得てゐた。それを他に及ぼす爲に立つた。

彼は、ただ四年間既定の制度機關の中で、之に當て嵌まる様、外部を整へて、教育者としての求めに應じて賣り出すのである。

昔の師匠は、師匠の人格と學風を慕ふて、師匠の許に子弟が集まつて來たのである。

彼は強迫されて集つてゐる兒童の處へ、他の爲政者に聘せられて、兒童の否應なしに、押し掛けて行くのである。

昔は子弟が師匠に薰化せられようとして自ら動いたものであつたが、彼は薰化すべく茲數日の内に出掛けて行くのである。

彼は彼に餘りの愚痴は言ふまい。時代の變遷は止むを得ない。併し今後の教育者は餘程の偉人でなくてはいけない。何等の徹底がない。四ヶ年間の殘糟の持主であつてはならぬ。彼は之から人の子を創造すべき使命を荷ふべき時季が切迫した自覺ある教師たれ。自己自身を創造する教師たれ。

||明治三十九年三月中旬

渭北學舎第二小團第一室にて||

小次席訓導のころ

◆彼の境遇は彼自ら創れ

彼は教育者になつて出て行つた。飽くまで自己は、自己によつて、開拓すべきものと鞭ちしもの。

自己は自己によつて開拓せねばならぬ。他人の書いた書籍は二種の滋養物である。夫れ自身に何等の價値はない。彼は此滋養物を吸収して伸びんとしつゝある自己をより大にせうと努力せねばならぬ。

誤つてはならない。本を読む爲めに、人の意見を聞く爲に自己が消滅してはならない。書籍を読む事により、他人の意見を聞く事によつて、益々自己が鮮明にならねばならぬ。

彼の境遇は彼自ら創れ

自己を捨て、環境に没頭してゐては、何時まで努力しても伸びることはない。書籍も刺戟も自己によつて自己を創る人にも有効である。

教育の仕事は、根本の理屈に於て、左程困難なものではあるまい。從來成功しない所以は、その行くべき道を行かない結果であるまいか。彼は行くべき道を行け。從來は「教育とは成熟者が未成熟者に云々」。之が誤つた道だ。教育するとは人を教ふると言ふ事でない。「教育することは自己開拓することだ」茲まで徹底せよ。之が彼の行くべき道である。結局人を教ふるのではなく自己が學ぶ事である。教育は教師自己が完成するに従つて徹底するのだ。自己完成への努力が、教育徹底への努力だ。人を教ふる工夫よりも自己開拓が教育の直髓だ。教へ上手よりも、學び上手であつて欲しい。そう言へば頭の固結してゐる教育者には呪はれるであらう。併し彼は恐怖してはならぬ。彼の行くべき道を行け。

「自ら爲す」もののみ凡ての境遇は與へられる。自ら努力しないものに恩恵は降つて來ない。人を教へて新しき境遇を獲んとする人の前から境遇は逃げて行く自己を開拓する人にのみ、より高き境遇が惠まれる。彼よ。彼が高き境遇を得んと欲するならば先づ學べ。拓け。研げ。伸びよ。そこに、期せずして神の御手より境遇が惠まれる。

自己の成功しないものが、往々境遇の罪になぞらへる。進展しない境遇、より低級なる境遇と雖も皆自ら作りし棺でないか。自ら作りし繩にて首を括つてゐるのでないか。人は努力によつて自らより高き境遇を創り得る。之が人間の特權だ。自己の成功しないのを境遇の罪だと逃げてはならぬ。自己は自己によつて、境遇を創り出さねばならぬ。

「ウォーレン夫人の職業」の中に、或時ウォーレン夫人が、利害問題から其の娘

体験せよ

三〇

井、一を口説き落さんと勉めた。その時井、一は、「誰だつてお母さん、或程度まで擇ぶことが出来ますわ、貧乏人の娘には、英國の女王になるか、ニューナムの校長になるかを選ぶ事は出来ないでせうけれ共、襤褸拾ひになるか、花賣りになるかは、自分の好みで擇べますわ、世間の人はいつでも境遇の罪と言ふ事をいひますが、わたしはそれを信じません、立身出世する人は、自身で奮つて必要な境遇をさがし出す人です。若しさがし出す事が出来なければ、それを自身で作ります」と答へてゐる。彼よ學べ、若き娘井、一に。

明治三十九年四月上旬

吉野川のほとりの寓居にて

◆ 体験せよ

彼は四ヶ年間の修養の如何に貧弱であつたかを、しみじみ感じた。

彼に体験せしめんと鞭ちしもの

体験せよ。彼。彼の貧弱さを感じよ。彼は四ヶ年の間 寄宿舎の一隅に閉鎖されてゐた。社會へ出るや、周囲の壓迫は甚しい。精神の抜けた、干乾びた偶像的な聖人扱ひにせられて、教員室と教室の狭い世界に拘束される。少しの缺點があれば、「教育者」なる名詞を冠らせて、人間以上に針小棒大に問題とされる。彼自身は何の恐怖もしないが、之がため兒童の信仰心を失ふ、徹底力が失はれる。子供が可愛相だ、之ばかりは彼も忍び得ない、自然に小さくなる、之で何の体験が得られよう。

學校では。社會では。かくては何時が來ても彼の教育は徹底しない。敢て彼のみではない。何時も、常識の乏しい例には、小學教師を擧げらるゝのを見ても、今後の教師は、書籍ばかりに、かちりついてゐてはならぬ。社會の壓迫に恐怖し

体験せよ

三一

てはならぬ。全力を注いで、各種の経験に接觸せよ。意欲本能を逞しくして、煩悶と懷疑の生活をせよ。各種の体験を握れ。而して眞の人生を理解せよ。其處に人生に即した教育が出来るのだ。人生の理解なく教育してゐる輩は、知識の切賣だ。商賣だ。教育ではない。

人生を観る。何を以て見るか、自己より外にない。同じく人生を観ても、自己に深い廣い体験のある人の理解と、何の体験もない人の理解とは天壤の差がある。人生を深く廣く解する人であつて始めて、教育者と言ふ貴重なる天職に就く事が出来る。その体験は本を讀んだのでは出来ない。人生の渦中で煩悶するより外ない。而して人生の凡ての苦痛を嘗め盡し、自己の内部の矛盾執着に悩み抜いた結果に於て獲られる。かゝる人であつて始めて、放蕩息子や、戀に落ちた娘の説教が出来る。放蕩した事のない、戀に悩んだ事ないものに何の理解があらう。感化力

があらう。其者に同情してやつてこそ眞の納得が出来る。人を導くには深い体験が在る。

眞の人生の体験は三十四五から五十にもならなければ、人間生活の大部は得られまい。勿論幾分は想像体験も出来るが。彼は二十一才の青二才だ。青二才だから人生へ突入して、各種の体験を得ねばならぬ。教師だからとて職員室や、教室へばかり閉ぢ籠つてはならぬ。自己一人の生活ならば、四疊半で、お茶でもたてて煙を輪に吹いて暮すのがよい。人を導く教師はそれではならぬ。事勿れ主義で退嬰的であるな。凡ての場合、自ら探し求めて人生の苦惱の中へとび込め。而して人生を味得せよ。人間通となれ。

|| 明治四十年五月下旬

枕山の麓にて||

◆ かゝる模範生を葬れ

當時「模範生の表彰」と言ふ事が流行した。彼は所謂「模範生」に反逆した。斯るものを創つてはならぬと彼を鞭打ちしもの

〔一〕 誤つた人生觀

從來「道德生活をしてゐる人」——「修養をしてゐる人」と謂はれてゐる人を見るとき誠に喰はぬ。靜的な、消極的な、引込思案の、融通の利かぬ態度の人である。

全く意欲や本能を滅却さして、外部的に固形化した、所謂惡をせない善人である。一面から見れば、肉的生活や、現實生活を否定した人である。

元を訊せば、儒教と佛教とのお蔭だ相だ。御利益ださうだ。本能意欲の枯渴し

て極端に靈を重んじ、肉的生活、現實的生活を排斥したものだ。難行苦行を事として、來世を夢み、深山へ遁入する事が人生だと達觀した。絶對禁欲を以て、道德生活の最上と誤解したのである。

中にも教育は者一世の先覺者、絶對に肉的生活や現實生活の排斥を強迫されて一層固形化された。中には、人間性の勃發に生きんとするものがあると、直に鐵槌で葬られてしまふ。

金錢を要求し、財産を要望し、名譽を希求する事を罪惡とし、家庭の一室に、教室の一隅に蟄居して、似而非なる仙人生活、聖者生活、惡く言へば偶像生活を爲してゐる教育者のみ最上のもことされた。教育者は之に副はん事にのみ努めたかゝる教師によつて啓發された一般民衆の偶像化するのは無理はない。

欲する處を行ふて矩を越えないのならば、黙する。併しそこ迄徹底したものが

幾人かある。只しかく見えても、それは形式的に、便宜的に、對他的に、虚偽に生きてゐるのみである。

〔二〕 國家の危機だ

眞實を要求する青年は、幾等禁欲を強迫しても到底及ばない。眞剣なる態度で陰に陽に、本能意欲に生きんとする。乾物の修養に一瞥をもしないのは、當然である。

支那の現況に至つた原因は、儒教の乾物のみを食つた証據だ。と言つて、敢て支那ばかり笑ふべきではない。前車の覆るを見て誠とせねばならぬ。現在我國の小學校にも、その標本があるではないか。訓練の行き届いて、其筋から表彰された評判のよい學校。見ると恐しくなる。

兒童は丸で借つて來た猫の様だ。教室ではまるで雛人形の陳列の様だ。運動場では、石地藏の様だ。屋外で走る事さへも罪惡と考へてゐる。之が亡國の徴でなく何であらう。

尙、氣の毒なのは學校の模範生だ。當局から賞狀一枚貰つたお蔭で、本能意欲は全く沒收されてしまふ。琴平金比羅神社の神馬の様だ。勿論神馬と同様の人間を作るのが目標ならば、何をか言はう。けれ共活動的の創造的の、尠くとも、世界の檜舞臺に立つ事の出来る人間にまで創り上ぐる事が任務である以上、涙がこぼれる。將來の國家が思ひやられる。殊に其處の教師達や父兄までが、意欲本能の消滅を強迫されてゐるのを見ては、誠に不愍の極みだ。事實は最後の批判者だ。「十で神童十五で才子。二十過ぎては平凡の人」だ。大人となつて果して何をか爲す。悪い事しない善人は得られう。それで國家が活躍するか。

かゝる模範生が、國家を双肩に擔ふもの。中堅人物。疑はねばなるまい。目醒めねばなるまい。彼は此濁流に棹して、奮闘せねばならぬ。國家の危機だ。

〔三〕 高き自己の創造へ

人は、二元の生活体である。人間は神でもない。そして禽獸でもない。醜惡なそして闇黒な煩惱と、清淨なそして光明な靈性との、二元の葛藤に悩んでゐるものである。人生の戦に苦しんでゐる。その苦惱によつて、人生を創造して伸展して行く。道德生活とは、本能意欲の理性化生活である。

由來本能と言へば、直ちに排斥すべきもの、意欲と言へば、直に抑壓すべきものとされてゐた。けれ共、今日の人間の進展は、長い間の人類の人間性の發露ではないか。禽獸より遠ざかつて神に近づいた事は何か。獸性を滅却して進んだ

結果でなくて、それを生かすべく神性化したものでなくて、何でこの様な發達が見られよう。若しも人間より、本能意欲の全部を去勢したなら人生は破滅だ。

道德とは、廣い意味の貴い意味の、人間性の生活である。人間性の生活とは、本能意欲に生きる生活である。ほんとうの自己の本性に根ざさざる道德は、虚偽の道德である。盲從的の、奴隸的の、他力的の道德である。模範生は此規矩に合したものである。教育者が増俸を要求すると、すぐ周圍から爆彈が投下する。大攻撃が始まる。けれ共考慮せねばならぬ。果して精神的に、増俸すら希はないものが何を爲しつゝあるかを。只正當なる道に據らずして効果を收めんとする時に惡となるのみだ。

以上の如く、道德生活とは、本能を發揮し意欲を旺盛にし、名譽を得んとし、肉的に、現實的に、自己を大にし、之を淨化し、醇化し以て、より深き、より高

き、より廣き人生の苦惱を嘗める事である。此規矩に合致したものをこそ眞の模範生である。

戦の大なる人程、苦惱の大なる人程、道德生活の深底に突入しつゝあるものこそ、眞の模範生である。反對に意欲せざる人、本能の満足を求めない人、煩悶せざる人、所謂現代模範的人物は、彼の眼より見れば、個人的にも團体的にも悪人である。

人間は、一代苦痛の生活である。戦ひの生活である。より大なる戦をなし、より深き人生に突入する人間を創れ。一日より一日、一年より一年と、より深き、より高き自己を創造する人間を創れ。それが眞の模範生だ。

|| 明治四十一年六月中旬 枕山の麓にてクチナシの花を見つゝ ||

◆教師としての靈的生活

1

教師は常に靈的生活をしてゐなければならぬ。何處かに一般の人以上に靈的な處がなければならぬと要求される。併し之は、人として一般的に要求すべきものである。教師であるが故に、よりよく要求される。

單に靈的生活と言ふ場合に誤解され易い。從來教師に對して要求されてゐる處の靈的生活の要求は、この誤られた禁欲生活であつたのであるまいか。

物質的や、肉体的生活を超越した仙人生活を要求された。座禪をしたり、斷食したり、或特別の型で修養したものを靈的生活と推稱されてゐた。修養の積んだ人だとされてゐた。かゝる人にして初めて教師として適任者とされてゐた。

併しそれが、眞の靈的生活であり、眞の修養であるか否、直に肯定はできない。殊にそれが人生の實相であるか否は疑はしい。

2

靈的生活をしてゐると見られる久米仙人は女を見て仙術を失つたではないか。靈的生活の爲に努力した大親鸞上人にも自然を捨てる事は、出来ないとい叫ばしめたではないか。それ以下の人間の實相を見れば人間性の内實は、形式に表はれた豫想外に深い廣いものがある事が知られる。教師として、克己禁欲の決行、物質肉体の放棄が唯一絶對の生活への道とは考へられない。

所有欲、保存欲等を超越せよと、如何に強いられても、それは出来ない。徹底した人だと自稱する人でも表面だけで、内面を探ぐれば頗る怪しい。自稱靈的生活者の中には、立派な家を欲しながら、名譽欲のため、美人に好感を持ちながら、

甘い飲食が欲しながら、賣名のために、虚偽に生きてゐるものが發見される。其人は誠に罪の大なるものである。

3

彼の言ふ靈的生活は、欲望の絶滅であつてはならぬ。出來得るだけ欲望を大にする事である。そして之を統制して行く事である。

道ならぬ事によつて、宏壯な建築物を造つたり、財布と相談せずして飲食に浸る事ではない。自然の生活を統制して、より高き、よりよき生活を爲す事である。之を彼は靈的生活と名付けるのである。單に、衣食住金錢の事であるから賤しむと言ふならば、それは誤られた理性主義であり、陥つた禁欲主義である。

眞の理想主義は、物質的肉体的の、本能欲望は何處までも尊重して行く。それは人間活動の根源だから。

本屋をあさつて、藤井さんや、西田さんの著書を見ると、此處迄徹底したいと考へる。川村さんや、三浦さんの著書や、親鸞の傳記など讀むと、此處迄體驗したいこの情操が燃えて來る。

併し、この精神方面のみが貴いもので、物質方面は價值の薄いものだとは言へない。たゞ物質方面は、間違ひ易いから、佛教や朱子學が特に誠めたのであらう靈的生活とは、對象が精神的と言ふ場合のみではない。物質の場合でも同様である。何れの方面にても、先驗我的自由活動によるか、否かによつて、靈的生活であるか、否かに分れる。從來唱えられてゐる様な靈的生活は、却つて教育者として人の子を損ふ生活である。

4

宗教生活と言つても、この生活に外ならない。形式的宗教生活は別として、精

神宗教的生活は、粗衣粗食禁欲が、その本質ではない。上述して來たそれが宗教生活であると信ずる。

勿論、宏壯の家に住み、美衣美服をつけ、美味に飽く事を知らないと言ふだけが人生の目的として活動するならば、それは的外れである事は言ふ迄もない。

人間は、何處迄も大なる欲望を飽くまで統制して、個人伸暢を圖り得る靈的生活でありたい。

◆彼の結婚の目標

彼は家庭の事情上早くも結婚の必要に迫られた。併し彼はその眞理に立たんと鞭打ちしもの

1

從來夫婦關係は、各種の方面から多數の人々によつて考察されて來た。多數の

書籍を読み、多くの人の意見をたいたが未だ肯定に價するものを見出さない。容色に對する情緒の動き。趣味の一致。才氣の好愛、相互の理解、性慾の満足。収入の増加、寂漠の慰安、一家の維持、活動の分擔、生活の安定等一通りでない併し之等は何れも低級なる目標であらう。容色にしても永久のものでない。趣味だけで人間生活が満足されるものでもない。才氣を愛してもそれは、より他に愛する人の爲めに奪はるであらう。相互の理解と雖もその時の事で、永久的の人間の同一境遇ではない。性慾の満足ならば、猶更危険だ。より高き満足に動くは勿論である。収入の増加は問題にならぬ。寂漠の慰安は、之を満足する境地に立つ時は不必要を叫ばれるであらう。活動の分擔は、之を受持つ人の出來た時に、夫婦の効力は失はれる。之では何時かの時期には破壊するより外ない。

2

稍、彼の意を得たるものは神秘説である。もと人間は中性的の個体であつた。之が神の意志によつて男女に分割された。今は元に還る爲に男女が夫婦生活を爲すものである。之は神秘的に相互扶助を説いたものである。之によつて相互の個性を尊重して、完全なる人間の表現を爲さんとするものである。夫は婦の缺點を補ひ、婦は夫の人格の缺點を補はんとするものである。之は誠に都合のよい考へ方である。併し之とても考へ方によりては、巧利的のものと云はねばならぬ。相互に缺陷の補缺が出來た後を假想すれば、夫婦關係は失はれる。

3

彼の結婚の目標は、子孫の繁殖より外にない。頗る自然科学尊重の様だが止むを得ない。彼が實現する曉は必ずや、此目標の基に結ばれるであらう。草木の自然的生殖も子孫繁殖の事實に外ならぬ。併し人間の結婚を植物同様の方法を以て

實現せよとの主義ではない。彼の根本規範は、茲にあるべきだと言ふ事である。完全なる子女を産み完全に教養して、完全なる人間を創り益々子孫の發展を圖るにある。此規範によつて實現する場合には、容色も、趣味も、才氣も、理解も、収入も、活動の分擔も、個性も、條件の内に加へられるものであらう。併しそれは規範ではない。なるべく之等の満足と言ふ事を、度外視せないまでである。

夫婦關係は、よし始め此自覺がなくなるとも、自ら規範は生れて來るものである。最初より此規範に従へば、夫婦關係成立の後には、益々濃厚となつて來る。それは貧富の位置によつて變るべきものでない。此見地に立てば、他人の容色も、趣味も、才氣も、理解も、収入も、活動も、其者の爲めには何等の刺戟とならない。然るに、若し子孫の教養が目標でないならば、他人のよりよき容色に動くは、理の當然である。趣味に、才氣に、理解に、収入に、活動振りに、刺戟されて現

在の對者を放棄するは自然の道行きである。子女の教養を度外視し、單に容色の爲めに、趣味の爲めに、地位の爲めに、金の爲めに、轉移するであらう。

4

彼は對者を考ふる場合、人格者を思ふ。人格者とは、結婚の眞理を彼が考察する如きものを捉へたる人である。かゝる考察を所有してゐる人、又は創造し得る人を自己の對者として得たいと念じてゐる。かゝる對者こそ彼に對して尤も愛を捧ぐる人である。かゝる對者にこそ、彼も亦滿腔の熱誠を惜しまないものである。かゝる對者こそ彼の容色の漸次衰へて醜きものとならうとも。何の問題にしないであらう。彼が逆境に陥らうとも彼を捨てる事はあるまい。結婚前に考へた程彼に才氣がなくとも、彼を激勵して才氣あらしむべく勉むるであらう。彼は對者の趣味が低級であるならば飽くまで向上に勉める。自己に對する理解がなければ理

解し得るまで、ゆる／＼と説くであらう。個性に飲ぐる處があれば勿論、補ふ事に努めるであらう。かくして、彼と對者子女の創造と云ふ一点に努力が集注する勿論子女の創造には、凡ての完全に待たねばならぬから、そこに相互愛によつて各個を伸展せしめつゝ國家的、世界的、活動人物を創造するのである。

5

子孫の繁殖、子女の教養、之は彼の目標である。然るに此目標によつて、結婚したる場合に、萬一子なき場合は如何。「子なきものは去る」の古き規範に従ふべきか。子のあるか否は、結婚後に於て知悉する事の出来る問題である。故に結婚前に、子女の教養に努力するべく意志の投合によつて成立したものである。然るものを子なき故を以て夫婦關係を斷つ事は出来ない。子女をあらしむべくお互に永久に努力するより外ない。それが彼と對者との結婚をして益々意義

あらしむるものである。

明治四十二年九月上旬

枕山の麓 寓居にて

◆生命の躍動

1

「完成した教師」と言ふものがあらうか。そして完成した教師の内容は如何なるものであらうか。

之は到底數量を以て、顯はす事の出来ないものであらう。簡単に、人の知情意と三分して考へて見ても、その程度が知れない。まづ知識の方は答案でもとれば幾分かは知り得るかも知れない。感情、意志に就ては、到底分るものではあるまい。

人間價値が明確に圖る事が出来れば、誠に都合がよいが中々さうは行かない。よしそれが、明かとなつたとしても、それだけで完成したと言つてよいか、到底決定がつかない。

2

完成に近い人とは誰れか、釋迦か、孔子か、クリストか、之等の人々も、人格のより高き方々には違ひないにしても完成した人とは言へまい。

完成とは何を意味するか、一面から見れば標準に合致したのであるから結構な言葉だが、一面から考へるならば誠につまらぬ語ではなからうか。

それは、人間の發展流動躍進が停止したと言ふ事となる。之より退却せざるを得ないと云ふ極限である。山の上へのぼり詰めたる形である。之より降らざるを得ないからである。

人がもはや極限だと決定したら悲しいものであらう。進歩發展の止まつた人は言はば、價値の失はれた人である。之では教師としての價値はない。

教師としては哲學的根柢の外に持つてゐなければならぬものがある。其中で尤も肝要なのは、自學的精神である。自學によりて生命の躍動してゐる事である。不斷に進化發展しつゝある事である。自己を教育開拓進展せしめつゝある事である。

3

教師は、教へ上手よりも學び上手でなければならぬ。停止した人物でなくて流動しつゝある人格でなければならぬ。よし現在有してゐる知識は低くとも、感情に不純な處があるとしても、それが不斷に進歩しつゝある教師ならば、それは活きた人格者と言へる。活きた教師たり得る。

凡ての点に整ふてゐる人格者でも、人格の流動を失ふた人ならば、それは既に死したる人格である。

4

自ら學び得る人であつて、初めて他人を學ばしめる事が出来る。常に進歩しつゝある人にして、始めて人間を進歩發展せしめる。生命の躍動してゐる人であつて始めて、教へ上手である事ができる。

完成したものはあり得ない。只彼は不完全なる自己の人格に満足せずして、より高く、より深くならんと努力するより外ない。彼は、之を以て唯一の信條と心得ねばならぬ。

教師が眞に自己の貧弱を自覺して向上への努力を深く爲す人自己を深く見詰め

て自己を教育し得る人にのみ教師たる特權を附與されるのである。

5

教育は術ではない。方法ではない。人格の上に立たない方法は如何に巧妙を極めても、それは手品師のする業と何等擇ぶ處がない。

教育は生きた人格の所有によつてのみ人格を作る。眞に自己が學ぶ事になれば對者の人格を引きあぐる方法は、自らその間に生れて來る。

方法を苦心する事によつて人格は生れて來ない。けれ共人格を生かす事によつて自づと方法は生れる。この眞義にふれて努力せねばならぬ。

6

かゝる意味に於ての教師の人格は、不完全が常体である。だから吾は教師なり完全なり、吾を見倣へと大上段に出られるものでない。

たゞ、教師は兒童の前に自己の貧弱を懺悔して共に修養への向上への道に營しむ事を告白するより外ない。

「子供を教育する権利あるか」の議論も此邊の消息を物語るものであらう。

教師の教育は上等の部で相談役である。實際は共學でなければならぬ。その人のみ兒童の共鳴と欽仰を得て眞に教師たり得るのである。

教師は飽くまで完成へと努力しつゝある生命の躍動の生きた人格の持主でなければならぬ。而して始終兒童と共に修養に樂しむ者でなくてはならぬ。

◆ 母は永遠の生命の創造者

彼は、毎日愛兒の活動と、母として妻の教養をみては、しみじみと、永遠の生命の創造者は母である事を感謝せずにはゐられなかつた。

人間は此の世の中に生れ出た時には直に人間としての大活動は出来ない。潜在的に大なる能力は持つてゐるとしても直に自分獨りで生活はして行けない。全く周囲の多數、殊に母親の力によつて生長して行く。教育されて行く。

生れると直ぐ持つてゐるものは、單なる形だけの物で内容は空虚である。之が經驗する事によつて擴張充實されて中實のあるものになつて来る。生長しつゝ學習しつゝある間に活動の出来る人間となる。生れ落つると直先きに活躍する本能は模倣である。之に依つて語言動作の凡てを盛んに模倣して吸収する。此最初に

模倣した凡てが彼等の一生の運命の基調となる。それがそのまま、全生活を支配するとは限らぬが大なる勢力を持つてゐる。最初に與へられた印象が永久に子供の心鏡に泌み込んでそれが一生涯の背景となる。

善良な家庭には有爲な子供が出る。この子供は將來幸福である。國家の爲めにも世界の爲めにも貢献する事が出来る。不良な家庭には自己を滅し國家に毒し世界を悪化せしめる子供が出る。誠に家庭の精神的環境の力が如何に恐しい大なる影響感化を與へるものであるかは余りに明白である。そして家庭の中心——感化の中心は母親である。母親の言語動作、性格が悉く子供の性格の基調を作つて行く。丁度彫刻家が一分一秒と毎日自己の創造せる肖像を刻むと同様に、無意識的に母親は子供の將來の永遠の生命を刻んでゐるのである。母親は自個的の、國家的の、世界的の優秀な獨自性の價値的人間を創造する權利と義務と機會と力を握つて居る。母親の全生命の傾注するか否にかよつて永遠の生命者が創造されるか否かにある。學校教育はその上に築かれる。基調は家庭にある。子供の善悪は母親の善悪による。チヨーチ、ハーバートは「一人の善良なる母は百人の教師に當る。彼は家庭に於ては總ての心を引く磁石である。總ての眼を引く北極星である」といはれてゐる。

眞に母親は教育者である。直接發明家として立てないにしても、或は聖人傑士となれないにしても、將又直接國家を進展せしめ世界の文化に貢献する事が出来ないとしても、此文化人を創造するものは母親である。母親を外にして子供の血管中に永遠の生命を注射して活躍せしめるものはない。母親の使命たるや實に尊く且つ重いものと言はねばならぬ。

明治四拾三年七月下旬、

愛兒の活動を眺めつゝ、

◆ 純真な子供を知れ

1、蟬の聲にとびだす

蟬が鳴き出す、すぐとび出す。樂隊が来る。すぐとび出す。廣告自動車がかかるすぐとび出す。友達がくるすぐとび出す。之が子供の本性だ。それを怒鳴りつけて家の内に籠城させようとする親の氣が知れない。

2、兄の頭をボカン

弟が兄のおもちやを失敬する。兄はすぐボカンと參る。兄弟ばかりでない。友達ともしきりに喧嘩をする。而かもその根據は薄弱だ。その喧嘩を抑壓しようとする消滅さそうとする。喧嘩は子供の本業だ。抑壓消滅してはならぬ。之を善導することにある。

3、繪本をジャキジャキ

大事の玩具をこはしてしまふ。鉛筆の芯を取り出す。繪本を切つてしまふ。筆の穂を抜く。お父さんの懐中時計を持出してこはす。そして喜ぶ。親はすぐに目をむく。

この破壊はやがて自己を建設して行く大事の學習を忘れてはならぬ。

4、カバンを投げ出す

毬を使つてしまへば座敷へ投げ込んで置く。學校から歸ればカバンを投げ出す。鉄と雑誌とを持ち出して座敷一室紙屑だらけにする。着物を着換へるとそのまゝに打ちやつて置く。そして平氣だ。之が兒童の自然の生活だ。兒童は合理的に價値を見出す事は出来ない。

「もし之がなかつたら」と言ふ経験を繰り返さして味得さすより外ない。

5、不従順な子供の製造法

親が我子を理性的に合理的に親の考へそのまゝを押賣りせうとする。子供は自然の生活者である。それを直ちに親が希望してゐるだけの發達点に直に引きあげようとする處に不従順なものが生れる。親は満足出来ないし子供は苦しむ。親は服従しないと云つて矢鎌しく言ふし、子供は欲望が通らないとなげく。お互に理屈はある。理屈では自然性の醇化は出来ない。何處までも、兒童の要求を肯定しながら自然性から漸次ぬけ出でしめるがよい。

6、子供は欲望の權化だ

遊びたい。走りたい。破壊したい。買ひたい。持ちたい。食ひたい。着たい。

子供は實に欲望の權化だ。満足されなければ不快の感を起す。之を醇化させるのが親の務だ。醇化さすとは全然自然性を肯定するとの謂ではない。同時に全部壓迫する事でもない。自然性がそのまゝの姿で出て來るのではなく、理性の萌芽の光に浴して發現さす事である。

7、密柑の分配は大問題

密柑一つ分配する位「何そんな事に」と大人は考へる。けれ共子供自身のために大問題である。パイゴマを兄が使ふ。「何金屬だから」と大人は思つてゐるが、子供の自然性から言へば容易ならぬ問題である。天下をとられた如く自身の力で大争闘がはじまる。

「之位の事に」と高飛車に親は出る。子供は何等の共鳴は起らない。なるほど

彼はかゝる思索の元に結婚の媒介に努めた

六

感せしめるには苦心がいる。自然性の醇化は骨が折れる。

◆彼はかゝる思索の元に結婚の媒介に努めた

彼は教育の振興を家庭教育に待たなければならぬ。而して家庭教育の改善は結婚の改造に據らなければならぬ。結婚の改造は媒介者の凡てが、教育者でなければならぬとの結論に到達した。そしてその義務を果すべく努めた。

〔一〕家庭教育改造の出発點

今日尤も不徹底なのは家庭教育である。教育者の努力は、此點にまで及んで行かねばならない。

家庭は、人間が臍の緒を切ると眞に發育教化、陶冶の場所である。学校教育へ

の基礎であり、社會活動の中心場であり、知識の收得場であり、人類開化の第一歩の活動場である。茲で薰陶され成育されて學校に入り、人格をみがきて社會に出でて活動する。

然るに今日の家庭が此要求に副ふべく發達してゐるや否。甚遺憾なものがある。今後の教育者は、此點にまで努力せねばならぬ。而して家庭の改造は結婚の改善に待たなければならぬ。

斯く考察する時は、結婚の改造は教育と尤も密接の關係あるものであつて、教育の徹底を欲するものゝ、當然努力すべき問題である。

今日の我國に行はれてゐる結婚に就て、缺陷のある事は一般に認められてゐる處である。就中その媒介に就て尤も甚しき缺陷を發見するものである。教育者は今後出來得る限り努力し、以て家庭教育の改造を圖り、進んで學校教育の進歩を

彼はかゝる思索の元に結婚の媒介に努めた

七

圖らねばならない。

〔二〕 従來の媒介の缺陷

従來に於ての媒介が、神聖なるべき結婚を如何に毒してゐるかは衆人の認めてゐる處である。

従來尤も媒介の上に一般にその弊害を残してゐるものは、所謂「媒介口」と言ふ事である。即媒介者は、如何に虚偽の事實を暴露することも、些少の言責もない習慣の許客である。敢て媒介するに當つては、媒介者は、兩親及當事者の要求を豫想し、それに迎合するため、虚偽を作爲しその意嚮を迎へるのである。故に多數の媒介を爲したりと言はるゝ人は、虚偽を作爲するに巧にして眞實らしく説服し得る人である。

以上の如くにして、一般父兄及當事者も長年月の因襲に慣らされて來た結果、媒介者と言へば、虚偽者だと斷定してゐたのである。偶々眞實を語るものがあつたとしても、一般的に解釋されて成功しない場合が往々にしてあつたのである。

又よく媒介者の言として使用されて來たものは、「精々他に聞き合せをせよ」この逃げ言葉である。之は兩親及當事者に對して眞實の言ではなくて、媒介者が自己の虚偽を信用せしめんとする唯一の守本尊として使用するものである。

兩親又は當事者が、對者に就て各方面の調査を爲すに就ては、實は非常に困難である。例へ調査する事が出來たとしても、それは眞實ではなくて、其の場がこれの答辯たるに過ぎない。

かくの如く兩親又は當事者が各種の方面を調査せなければならぬならば、それは既に媒介者の任務を果してゐないものと言つてよい。夫等は凡て媒介者の責任

彼はかゝる思索の元に結婚の媒介に努めた

ある調査を提供せねばならないものである。

彼等媒介者の媒介の目的は那邊に存するか。言はずと知もれた金の爲めである。拷へ料の一割、若くは結納金の三割とか勝手に歩合を規定して法外の要求を爲す事である。かく金の爲めに努力してゐる彼等媒介者は、資産なきものに對してはその依頼も謝絶すると言ふ態度を示すし、之に反し周施料の多き家庭に對しては百方手を盡して媒介の争鬪戦が行はれる。

かく物質的に生きてゐるものが、何で精神的に結合せなければならぬ人間と人間の媒介が出来よう。この一事だけでも従來の媒介者が無意義である事が証明されるのである。かゝる思想によつて結ばれた媒介が一般に如何に悪結果を及ぼしてゐるかを想倒する時は戦慄せざるを得ないのである。

〔三〕 教育者は相談相手

従來に於ける媒介に對しての教育者の態度が甚しく固陋に陥つてしまつてゐる。教育者は結婚に對しては、全く教育埒外のもの、無關係のものとして、對岸の火災視してゐる。而して結婚の媒介には目も觸れないのである。往々教育者の中には教育の根本を究明して、本問題の解決に努力すべき事を自覺してゐるものがあつても事勿れ主義、消極主義に傾むき、萬一を慮りて積極的に努力しない。若し青年男女より結婚に對して相談をかけらるゝ事があるとしても、之に應ぜないのである。教育者として許すべからざる點である。

結婚時期の男女の性格學業その他萬事の調査を爲すに尤も便宜を有してゐるものは教育者を措いて外にない。人格の批判を爲し得る參考資料を持つて居るもの

は教育者である。故に此方面のみの理由からでも結婚の媒介は教育者が爲す事が尤も當を得た事となる。國家の發展、教育の根本から考察するならば、猶更に此方面に努力せなければならぬ位置に立つてゐるものである。

されば今後の教育者は、單に教室に於ける教授に努力するのみならず一層此方面にまで努力せねばならぬ。教育者はよろしく、同情あり理解ある相談相手とならねばならぬ。

[四]

以上の根抵に立ち、教育に對して飽くまで眞實を發揮せんとする彼は、相當此媒介に努力したものである。現在幸福な家庭を作られてゐるのを見ては、誠に愉快に堪へぬ。常に彼は結婚に對する從來の缺陷に鑑み、本質の上に立つて媒介し

た。今左にその留意點を略述する。

(1) 當事者の人格を發見すること

從來の媒介者は、單に多數の候補者を調査し置き、而して媒介に當りては、物品の賣買の如く、甲候補者を斷られては乙候補者を勧誘し、而かも候補者選定の要件が、いつも資産調度容貌等の外面的の事項にのみ止まつてゐたのである。

彼は此弊害に鑑み、先づ兩者の人格を知悉する事に非常に苦心したのである。その要件は第一は性格、學業、体格である。之が爲めには、平素多數の人の人格に接觸せねばならぬ。敢て彼の媒介せし婦人は、同僚、姻戚關係のもの、始終家庭へ出入するもの等その人格を知悉したものである。その人格に對して充分に了解徹底したるものみに就て媒介したのである。進歩したる社會に於ては、かゝ

る要を見ないけれ共、今日の場合としては、之が媒介者としての責任である。故に媒介者は一人物を調査するに就ての長年月と苦心とを要するものである。

(2) 創造的人格者を見出すこと

兩者の人格を知悉して、之を根抵として媒介せねばならぬ事は、前述の通りである。さて如何なる人格者を推薦すべきかは大に考究すべきものである。彼は彼の人生觀の示す處に従つて媒介をしたのである。

世の實際について見るに、結婚當時風評の善良であつた家庭に、數年の内に風波の絶わぬ例は尠くない。又反對に其當時は、一般より甚しく不足に見えたる家庭に於て、漸次模範家庭を作る事がある。尤も之等の事實に就ては各種の事情の綜合によるべきものとはいへ、其根本は當事者相互の人格の現れである。

敢て吾人は媒介に當つて、常に創造的人格に生きてゐるものを指定するのである。時勢は進歩して止まない。従つて生活は新しく創造されて行く。故によりよき生活を營むものでなければ、到底人生の理想に到達し時勢の要求に應ずる事は出来ない。だから媒介に當つて彼は、此創造的人格者を見出す爲めに苦心したのである。

創造的人格者ならば、よし現在に於て満足出来ないとしても、將來に於ては、必ず歡喜の時機が到來する。創造的人格者の作る家庭は必ず幸福を生むものである。而して之は直に國家の消長に關係するものである。

されば媒介に當つて之を見出すには、數ヶ年間その者の人格に對して慎重に調査するの要がある。斯くすれば、その調査は大抵は眞に近く、皮想的に流れない適任者を得る事を信ずるものである。

彼はかゝる思索の元に結婚の媒介に努めた

七四

(4) 人格を披瀝すること

従來の媒介は虚偽の多き事、むしろ全都であつた。併して媒介者も一般民衆も夫等に對しては之を普通事として責任を咎むる處もなく、又耻づる處もなかつた事は前述したる通りである。その渦中に立つて、彼れが眞實の表現を爲す事は、餘程の忍耐と努力を要する。彼れが眞實の態度に立ちたる場合、往々にして普通一般の媒介者態度と同一視せられて、媒介が成立しなかつた事が尠くなかつた。併し永年の間には必ずや認めらるゝ時機が到來する。之を待つより外ない。彼は彼が媒介の回数を重ねるに従ひ自ら信用の生れて來る事を信じてゐたのである。彼が媒介の際は、常に當事者の人格の全部に亘りて(殊にその長所短所)眞實に披瀝し置くのである。神ならぬ人間は必ずや缺點を有する。それを神として、その缺點を隠蔽し長所のみを誇大して、その成功を早めんとのみ努力して來た之は

近き將來の涙の種である。彼は此點を改める事に留意して、常にその缺點を述べ充分なる了解を求めた。

凡て豫め缺點だと理解しての成立には、夫々補充の道が講せられる。其處には缺點が缺點として表はれない。却つてそれが幸福の種となるものである。若し之を掩ひ隠くせば、かくす程その缺點がよく表はれ、侮蔑となり、反感となり、家庭の不和を醸すものである。

かく媒介するには、常に彼は當事者の人格の全部を解放した。其處に安心と共鳴とによつて幸福なる家庭を作らしむべきである。

(4) 慎重の態度を探ること

媒介は、長びくに従ひ他より種々の障礙の爲め破壊に終る事が多いのである。

彼はかゝる思索の元に結婚の媒介に努めた

七五

且つ從來の媒介者間には、其間に於て相當争鬪戦が行はれた。また一方に於て、一般にも媒介者にも両親にも低級なあきらめが因襲的にあつて、式さへ終れば、あと始末のつくものとの考への爲めに、非常に決定を急いだものである。

抑も結婚の決定には、當事者相互の理解がなければならぬ。それが爲めには相當の時日を要する。それを駆足的に、氣まぐれの的に、思ひ出的に決定しては何の幸福が増進されよう、人格の融合が何處にあらう。遂に虚偽の生活が破裂して離婚の憂き目を見る事であらう。日本人位離婚の多い國民はない。その原因は種々なる見地から眺める必要があらうか、此出發點を誤つたものが尤も多數を占めてゐると言つてよからう。

猶茲に考慮すべきは結婚の年齢といふ事である。結婚の時季の決定は勿論、心理學や理生學や法律等の定むる所、指示する處に従ふべきものである。即ち結

婚の資格は、法律の定むる最低限を備へたるものを言ふのではなく、又普通一般に何の根據もなき習慣的に、定められたる年齢でもなく、眞に子女の教育、夫の内助、父母への孝養、社會共率の奉仕の出來得る道德的人格の價值のものでなければならぬ。その時機を待たねばならぬ。その時機の來るべく努力せねばならぬ。その努力もせず、その修養もせざるものが、單に因襲的に、『年齢が來たから』の理由によつて結婚を急ぐが如きは以ての外である。眞の時機とは、修業の基礎の確立した、母たり、妻たり、子たり、社會の一員たり得る人格を得たもので、始めて家庭の人たるを得るのである。

之を要するに媒介者は何處迄も慎重の態度を以て、彼等に充分の修養をなさしめ、又、相互の理解を求めしめて媒介をせねばならぬ。

(5) 常に青年男女の相談役となること

現今の青年には、相當の意見もあり、理解もあり、且つ煩悶も持つてゐる。然るに、固陋な両親の傳統的頭腦のために、その理想と批判とは埋没されてしまふかくして苦惱に泣いてゐるものは尠くない。

よし賢明なる父母があるとしても、以上の事實は容易に打明け得べきものではない。此際相談すべきものは教育者の外にない。自己が教育を受けた教師程懐かしいものはない。此教育者に對して、青年男女は同情を求めるのである。

然るに、現在までの教育者の態度を見るに世間の風評に恐怖して、萬事、事勿れ主義種々の口實を設けて、此相談に應じない。態度を鮮明にしないのである。

近時の青年は、結婚に對して、相當に、衷心的の了解を持つてゐる。夫れに對して、單に、灰色的、妥協的、出任せの態度を示す事は、大なる罪惡である。青年男女の眞實に對しては、飽くまでその衷心に觸れてやらねばならない。

教育者は、常に衷心の態度となつて、青年男女の相談相手にならねばならぬ。彼は、常に此主義によつて青年男女と共に語り、談じ、導きつつあるものである。眞の教育を思ふとき茲まで徹底せなければならぬ。

[五] むすび

以上は結婚の媒介に對し、教育の根本より眺め、結婚の本質に立脚し、社會の現況に鑑み、彼が努力しつゝある點を述べたのである。現在の社會に於ては、教育者が全部此媒介を負擔すべきものだと思ふものである。我田引水だとは言は

彼はかゝる思索の元に結婚の媒介に努めた

△

は言へ。かくして、漸次家庭教育の根本義、國家教育の第一義に觸れるものだと信ずるのである。

明治四十三年九月上旬

宿直室にて

園田小學校長のころ

◆ 校長十年案

彼は、卒業後四年目に十二學級の校長として赴任した。彼の思索は遂に校長十年案を生んだ。而して十年間は同校に於て努力せんとの決心で始終彼を鞭つた。

[一]

尠くとも十年以上、同一の場所に於て専心活動しなければ、眞實であり而かも徹底したる仕事は出来ない。相愛の夫婦であつても眞實の情愛と徹底したる理解とは結婚して二年や三年で味得されるものでない。お互に友白髪となつて後の事である。

小學校長のころ

△

況して教育事業は「國家百年の計である」と謂ふべきもの。深遠なる計畫と絶大なる努力を要する事言ふまでもない。だから校長として充分に其の價値を發揮するため、彼れ校長は一校に十年間努力せんとの主義を持つものである。

〔二〕

曰く「教育の任にあたるものが、真に天職であり、永遠の使命である」と自覺して眞の生活の表現に立つ時、何で苦んで場所を撰ぶの要があらう」又曰く「吾人が人間性の教育に携はる以上、國家の教育である。である以上、之に携はる教育者によつて其差異を見出す事は出来ない」と之れは大觀的の論である。眞に教育を徹底的ならしめる爲めには、甚しき不擴充を發見する。

眞實なる徹底したる教育とは、教師の人格の流れと、兒童の人格の流れとが、

渾一して、教師の大なる流れに、兒童の小なる流れが抱擁されて行く事である。知識の切り賣りならばともかく、此意味に於ての教育は、眞劍なる教師によつて、同一の場所で、長年月生活の表現を要求せなければならぬ。

校長は、人格の光の主体である。その流れによつて、教師兒童、學校内の空氣を校長化し、社會民衆を校長化するのである。凡てのものが校長の人格の流れに渾溶融化されるのである。之が徹底したる時、始めて、眞實の教育と呼はるべきである。

教育の徹底如何は、校長の人格の流れ、生活の表現の強弱と、之が作用する時日の長短によるべきである。

〔三〕

近時、一年二年の短時日の交迭が増加して來た事は、誠に國家教育の爲めに、憂慮に堪わぬ次第である。之等は校長自身の自發の場合と、當局よりの受動的の場合との別はあらう。けれ共それ等から、生ずる處の惡果を想到する時は、甚だしく戰慄を覺ゆる。眞に教育の本義に觸れん爲めには、此不條理な不見識な短時日の轉任を改造せねばならぬ。

こは困難なる如く見ゆるけれ共、爲政者、校長、市町村當局者の計畫と、自覺と、寛容と、擁護とによつて實現し得べき事を信するものである。

[四]

凡て、教職に従事せるものの中には、その個性によりて、一校の主宰者として尤も適當なる者がある。又終生訓導で終るべき者との差別がある。之は、その個

性上止むを得ない事である。

爲政者は、よろしく、人格、學識、技能、經營、統御等各方面に就て精査し、「適材を適所に」の規範によつて校長たるべき者と、然らざるものとの決定を見ねばならぬ。之はその人の活動を堅實ならしめ其能率を高むる所以である。

然るに現實に對して執着心の強きものは、自己の能力を反省する處なく、單に自己の勤績年數や、同年の昇進者を根柢として、校長たらん事を要求する。若し入れられない場合は、却つて他を羨望し、嫉妬し、誹議して、不平と怠業とに消日するものあるを聞く。

教育は、生の實現である。校長たると訓導たると問ふべきものではない。自己の場に非ざるものが何を苦んで校長の椅子を占めねばならぬかを知るに苦しむ。校長たる資格なきものは、永久に訓導として歡喜して努力せねばならぬ。

しかする事は、眞に自己に忠實なる所以であり、教育に對して眞の理解を持つものである。この徹底を持たぬ教育者が教職に煩悶し、焦燥するならば、それは實に人の子を損ふ者である。

[五]

爲政者もまゝ要求の肉迫に對抗し對す、又は政策上より、年次による決定を見る事が尠くない。

校長の選定は此主義であつては永久に進展はない。飽くまで校長は適材を抜擢せねばならない。差別的抜擢主義に待たねばならぬ。之れは教育の根本義に立つて肯定せねばならぬ事實である。

此抜擢主義に準據せる處に、教育の効果を發揚せる事は既定の事實である。こ

は何も抜擢された其者が、その抜擢に感恩して自憤した結果ではない。各自の才能に應じて、最善の活動をなすべく、適材を適所に活躍せしめた結果である。

若し校長自身が、校長の位置を占めたる後に於て、眞に自己がその位置に非ざる事を自覺する時は、自ら進んで訓導となるだけの決心がなければならぬ。

單に、永久に、校長の椅子にかちりつかんとするものがあるならば、その人は校長は勿論、訓導としても唾棄すべき人であると言はねばならぬ。爲政者に於ても直に校長の椅子を返還せしむるだけの斷乎たるものを要する。

「汝自身の場所に坐せば何人と雖も撃退し得ざるべし」とは千古の名言である。眞の自己の場所は「天上天下唯我獨尊」である。之に反するものは自己を眞に表現する所以でない。殊に教育の根本義に校長訓導の別を認むべき所以はない。

[六]

爲政者が、一旦校長に任ずる以上、徹底したる誓約を爲さしめ、然る後十ヶ年
の間、彼に一心不亂に努力さす事である。而しての結果を報告なさしむべきであ
る。爲政者は尠くとも十年間は、校長の眞義の活躍を傍觀するだけの度胸があつ
て欲しい。其處に教育の伸張があり、健實なる革新が生れる。

それを一年や、二年の事實により、皮相觀察者の反對により、民衆の感情的注
言により、早計に「不能」の斷案を下す事は、教育上尤も大なる弊害の一つであ
る。若し之が事實ならば潔く校長の椅子を去らしむべきである。然るに濫りに、
校長として他に轉勤せしむるが如きは甚だ不見識の方法である。

凡そ將來永久の墳墓の地たる覺悟を以て發展を計る爲めには、その進路には必

ずヒュームあり、ソヒストある事に思ひを致さねばならぬ。爲政者は、單に、現
在の、一時的の障礙や一時的の無活動を以て、永久的のものと判斷する事は誤り
である。

もし、一時の結果より彼の地位を奪ふ事ある時は、四圍の校長は、此麻酔劑に
よつて、意氣消沈して無氣力となる。一世の木鐸たる活素は中毒され、其日暮し
の屠所の羊と化する。

よろしく彼れが、凡ての迫害と戦ひ活動し得る、自覺と自由とを與へ、十年間
は彼れの自我の解放によつて進展せしめる事が肝要である。

[七]

校長その人は任地に赴く前に先づ大なる自覺と確たる信念とを持たねばならぬ

傳統的な慣習的な職業的な型より脱却して、忠實なる自己の表現を爲し得るや、否。渾身の力で、眞劍なる自覺によつて生きる事が、可能なるや否を探らねばならぬ。此目醒めたる自覺、深刻なる自信によつて何者かが與へらるゝであらう。

校長は、その土地の土と化すべき覺悟と、一切を美化し靈化するだけの愛の力を持つべきである。如何なる苦惱も、困難も、迫害も、奮闘も、努力も、その土地の土と化すべき覺悟によつて、解決する事が出来る。千載を飾る青史に於て、一世を指導し、改革し、永久の喜びを贏ち得たる者の生活は、悲惨と努力との權化である。死を塔しての活動が眞劍の態度の活動である。只々廣き天下を夢想して、一年二年と其日暮しに校長の椅子を汚してはならない。十年はおろか永久にその土地の開拓者として生きねばならぬ。其處に眞實の教育が瀾漫潤滑するであらう。

一切を善化し、美化し、一切を活かして眞の教育の徹底を計る事が出来よう。愛は相互に信を以て繋がりしむるものである。相互を動かすものは此繋がれたる信である。此信によつて徹底したる教育が行はれる。

〔八〕

相互の信を体得する迄には、相當な年月を要するものであつて、一年や、二年で出来るものではない。永き年月の間、相互に接觸し、自己を表現する間に、交流された愛の蓄積によつて、捻出されるものであらう。教育は百年の計なりとは子供が大人となりてとの意味よりも、此感化の上より考察する事が妥當である。百年の計たる教育を、三年や、五年で完成出来得るとする事は、極めて低見である。

校長交迭して、新たに、相互の信を得て、肝膽相照らし合ふ迄には、數年を要する。ベスタロチーのノイホフに於ける貧民學校經營は、其眞實を語るものである。校長はそれだけの徹底がなければならぬ。

〔九〕

民衆は、學校教育に對して充分なる自覺と、同情ある聲援せなければならぬ。何處までも小學校を擁護するの立場に立たねばならぬ。

自己の主義精神の主張よりも、先づ、校長の主義方針に融合し、校長と民衆とは、同一のレールの上を歩む事が、兒童に對する影響より考察して尤も肝要の事である。然らざれば兒童は、甚しき二重生活に陥るからである。

學校長の主義方針及び、施設の實際を微細綿密なる批評眼を以て、詮議考察批

評するならば、校長も神ならぬ身の、缺陷は山と積まれよう。批評者も自己の反映である以上、十人十色で、全民衆と校長の意見とが、全く一致すると言ふ事は幾萬年後にも事實となつて來る事はあるまい。

されば校長の活動が、眞實であるとしたならば、愛の表現であるならば、それを何處迄も信じて満足すべきである。而して大に擁護すべきである。

成裕實務學校入學式當日の校長の訓話は、實に徹底したるものである。

「前略」諸君は、此學校を信じ、校長を信じなければならぬ。人物が出来上ると言ふには、學校の主義精神や、校長の努力といふよりも、以上に、諸君の此信によつて成される事が多い。若し諸君今迄の様に、理知の眼を以て見たり、單に學問を學ぶと言ふ事であつたら、此學校より何者も得るものはあるまい。何故ならば此學校は、單に知識や、技能を授ける學校ではなく、人物を作り上げやう

と一生懸命になつてゐるからである。既に學校で學ぶ以上は、何處迄も、學校を信じ、校長に任せられなければならぬ。此學校の教育は、諸君の信の一字によつてのみ活躍されるものである。」「後略」

又、昔、大掠中齋は、父兄に向つて曰く、「拙者に子供を托せらるゝ以上は、拙者は、お手前さんの子の、首を打ち落すかも知れない。それも承知か」と言つて、父兄の覺悟を促がしてかゝつたと言ふ事である。

昔は、一切を師に托した。故に方法は拙であつたかも知れぬが、充分徹底したものであつた。今日は、時勢の進展上、昔と同一には行かぬにしても、此信頼は兒童教育の根柢であるから、何處迄も之を擁護せねばならぬ。茲に彼は努力せんために十年案を物したのである。

||明治四十四年一月上旬

著藏山の麓の寓居にて||

◆此頃の青年に

(1) 細心と小心

細心と小心。近い様で甚遠い。細心とは深き思慮の事であり、小心とは、肯定しながらなほ實行に恐怖する事である。

細心とは持つべきものであるが、小心は直に捨てねばならぬ。凡て大事業を爲すには、よろしく熟慮して、大膽に實行する事だ。殊に今日の如き生存競争の激しい世の中に於ては猶更である。

此頃の青年には、柔弱不斷のものが尠くない。夫等の者は「極めて細心注意して、事に當つてゐるのだ」と満足してゐる。之では、世界の文化への貢獻も、まことに「日暮れて道なほ遠し」と言ふより外にない。

(2) 獨立と孤立

松の木に巻きついた蔓は、松の生命のある間だけである。人に頼つても其人の活躍してゐる間だけだ。助けて呉れてゐると思つても、實は當にならぬ世の中だ。

今の青年には、頼みにならぬ他人を頼みにして、頼みの綱が切れて泣いてゐる者が、其處等に尠くない。

自らは自らの方に頼め。蹂躪されても頼め。然らば厭だと逃げて、追つかけて庇護し、伸暢させずには措かない。誤つてはならぬ。自己を頼むとは孤立して生活せよとの謂ではない。自己は、他人によつて社會によつて進展擴充する。相互扶助によつて世界の文化への貢獻ができる。その前に先づ各自が獨立する事を忘れてはならぬ。

(3) 模倣と創造

模倣とは、刺激の通りに表現せんと努力する事である。所謂「猿の人真似」である。「その通り」に凡てを生産しようとするのは器械の仕事だ。人間が器械同様であつてはならぬ、眞に生きてゐるとはいへない。

器械的に模倣ばかりしか出来ない人間が多くては、その國家は何等の發展はない。

之に反して、より新しきものを創り出すのは創造だ。既に生産されたものを參考として、在來の型より抜け出でて、自己を表はしたものを案出せねばならぬ。人間は藁人形ではない。機械ではない。鏡ではない。總てを分解し總合し構成する能力を持つてゐる。單に型に満足しないで異つた各自の個性を發揮しようとするのが、人間だ。そこに個人は伸び國家は進み、進んで世界の文化に貢獻が出

來るのだ。

今の青年には、さかく人真似をするものが多い。之では、國家の將來も怪しまれる。人形にならないで、小細工な人間にならないで大膽によりよきものを創造する構成的人間となれ。異つた個性の持主として生きて行け。

◆彼が死生の境に湧いた宗教觀

彼は、三ヶ年に三回盲腸炎に犯され、三回とも醫師の手から見放された。時計の音を聞きつゝ、天井の節穴を數へた。その間に生れたもの。

信 仰 生 活

宗教に於ける信仰は、目に見えない實在に對しての歸依であり渴仰である。科學は光明を與へる。しかし、生の實現には科學ばかりでは納まらない。

彼の生活には、彼の精神に、温か味をつけてくれるものが欲しい。

科學は、**チツトモ**、彼に温か味をつけてくれない。之を與へて呉れるものは宗教より外ない。

世の中の凡てを、人間の感覺で解決して見たり、理知の眼で決定して見たりする事も、必ずしも悪くはない。併し、人間の眞の生活が、それ位で止まるものであつたら、もう彼の身体は醫師の宣言通り活動を停止してゐる筈だ。何れ土の中に冬籠りしてゐる事であらう。

眞の人間生活が、日常彼等の經驗の限界内にのみ止まるものであつては心細い實に、宇宙には、科學で、我々の經驗で解釋の出来ない神秘がある。人間の生存には秘密がある。森羅萬象、各々此神秘に支配されてゐる。科學が解し得てゐるのは、何萬分の一だ。その何萬分の一の事實を以て、何萬分の全体を解釋せう

としても、それは無理だ。何萬分の大部分は、人間の今の力では五官で聴かんとしても、聴けない。見んとしても、見ない。知る事の出来ないものである。体験するより外ない。若し此体験は彼一人でもよい。彼は病氣のために此体験を得た事を喜ぶ。若しそれが誤りであつても、彼の生の爲めには、非常な温か味である。

体験を得た彼には、無限の青空には大なる神秘を認める。彼の庭先に咲いてゐる莖にも、椽側の梅の枝に囀る小鳥にも、今日のしどろくと降つてゐる雨にも、無限の實在が潜んでゐることが見える。

況して、人の生れ、人の死す。其處には、大なる神秘がなくてなんとせう。それを信ずる事によつて、彼は、全人に抱擁せられて價值ある生をかり得る。

哲 言

我の心に嫌ふもの二つあり。

學者にして神を信ぜざるものと、無智にして迷信に陥れるものと。是なり。(マホメツト)

余が宗教を信ずるは、天國、又は極樂に行かんが爲めに非ず。余が之をなすは、

人らしき人たらんが爲なり。(内村鑑三)

祈 禱 生 活

祈禱とは、小我を捨て、大我に絶対に歸依する事である。手段方法は何でもよい。その人の信ずるものでよい。精神は、茲にあるべきものだ。祈禱を笑ふ人は未だ祈禱の精神を知らぬあはれな人だ。單に手段のみを見て信じ得ない薄倅な人だ。神の性質は自己の反映である。眞に祈禱の精神をつかみ得た人は、結局大な

る宗教を掴み得た人で、自己を大にした人である。

人間が自己の全力を盡した知識、畢生の力に行き詰つた時、即、日常經驗界を超越した境界に入つた時、人の心は誠となる。宗教心が表現する。

其超經驗、超理知の世界に行詰きつたとき、始めて超我の力によつて、自己は科學以上に伸展する。

此大成長は、生きるか、死ぬるかの、一大事に遭遇した時に初めて得る處の體驗である。

此死線の界を通るときに、人はより以上のものに必ず歸依し融合する。此状態が、眞の祈禱である。彼は祈禱によつて救はれた。

祈禱は、強迫によるべきものではない。それは姑息手段だ。氣休めだ。あきらめだ。祈禱は自ら芽生えて來るべきものだ。その時自己の信する手段によるべき

ものだ。

哲 言

眞の祈禱、眞の感謝とは、己が本分の家郷たる、神に歸依せん事を祈り、又之に歸せん事を感謝する事である。(西田博士)

日常の宗教生活

宗教生活。彼の謂ふそれは、所謂形式宗教の神への奉仕ではない。勿論、それを排斥するものではない。

日常生活に於て、精神上常に超經驗の世界と交渉しつゝ活動する事である。言ひ換へるならば、人生を尤も深く、廣く、高く、眞實ならしめる事である。

何も神酒を捧げ、御光を燈す行事のみ宗教生活として尊いのではない。如何に

熱心に此行事を爲すとも、日常の生活に神との交渉がなければ、それは兎戯に等しい巧利的のものである。

日常の生活に、日々の勉めに他意を挟まず、専念遂行する事である。専心、眞實に事を成し遂げて行く事である。所謂無一雜念となる事である。彼は教育者として、その職に他意を持たぬ事である。之によつて彼れは眞に教育者たり得る。之が宗教的日常生活である。

哲 言

余にして、神を信ぜざれば、寸時も宰相の椅子に坐する能はず (ピスマーク)

宗教がなければ、教養の調和なく、従つて人生の尊い意義が失はれる (シユライエルマツヘル)

無 限 の 愛

裏庭の隅に捨てられてあつた菜種が此程芽を出してそれが、いつの間にか伸びて行つた。

彼れは毎日病後の楽しみに之を見てゐる。十數日にて、極めて小さいながらも花が開いた。

彼は、其處に神の無限の愛を認めずには居られなかつた。

彼は、大空を何の苦もなく飛ぶ鳥や、はやる瀬を泳いでゐる魚を見ても、無限の愛に抱擁されてゐる事に感謝せずにはゐられない。

彼の日常生活の間に經驗する小事實の凡てに神の無限の愛が均霑してゐる事を信じた。

勿論彼れが死線の上を彷徨してゐるときにも神の愛に抱かれてゐる事に歡喜し

て、安らかに全快を待った。醫者から見放された彼でありながら、彼は死と言ふ恐怖に襲はれた事は一回もなかつた。

人は只外觀によつて、煩悶し、焦燥し、誹議し争闘する。

病氣の時は勿論、平素にも目に見えない神の愛に觸れて、内面的に力強い根深い生活が欲しいものである。

||大正元年十二月下旬 病床に腹這ひしつゝ||

◇傳 波 録

彼は、出來得る限り若い教育者たちの相手になつてゐた。それは何も人を導かんこの爲ではなかつた。始終鮮血の漲つた教育者に交つて常に十八九の青春に生きん爲であつた。時々返し手紙の一二。

(1) 研究心の深いU先生に

「考へて考へて、その結果闇になります」。この仰せ。之が光明——彼岸に達する道順でせう。本性、滋養物になりつゝある結果です。眞の闇の中に、目に見えぬ、自覺する事の胚胎——自發力が、適當なる温度と日光、空氣、肥料——考察創造によつて伸張して、完全なる成長がある譯でせう。書籍のみによつては、自己が消滅してしまいます。お考へなさい。苦しみなさい。煩悶しなさい。考察しなさい。その内に、いつの間にか、自己が伸びて行きます。眞闇だと煩悶なさる其處に、既に、自己を抱擁してゐるではありませんか。

只一の疑問も、煩悶も、起し得ない人こそ、傳統的な、教育を何よりの守本尊としてゐる人でせう。こんな人によつて教育さるゝ子供は可愛相です。實にこんな教育者は、教育上の罪人です。茲まで考へて來ると、君に教育さるゝ子供こそ幸

福です。

安心しなさい。そして何處までも考察しなさい。創造しなさい。君の思想は、今しだいに内へ内へと深く這入つてゐます。自己の本性を、あくまで見出さんと苦心されてゐます。其處に天職の價值があるのです。生の實現が、できてゐるのです。

君は、今第二期煩悶時代です。此時季は直ぐに通過して、第三期、思想擴充の域に突入します。眼に見ず、耳に聽かず、自分の頭を掘りなさい。腹を探りなさい。其處に、よりよき自我の成長を見出す事ができます。

(2) 身体の爲めに体育に努力せんとするS先生に

一、さうですね。僕は別に考察した事はないが、僕が静座法をやつてゐる事は

「生きる爲めの實行」と言ふより仕方ない。「眞實の表現」と言つてもよからう。往々、單に「身体を健康にするために静座法をしよう」。又「現に實行してゐる」と言つても、之は誤謬ではなからうが、僕から言へば不擴充だ。

肉の上の顯れは、數量的に、客觀的に知り易いから之ばかりを見て、身体の爲めだと一決するのであらう。それは淺過ぎる。何處迄も「靈」の問題である。人格の向上の問題である。

身体上變化は、たゞ景物に過ぎない。單に身体の治療的に、維持的に考へて、静座法を實行せんとするならば、眞の成功はない。

何處迄も人格の問題だ。自我の問題だ。そこを一考して貰ひたい。

二、「静座法でなければならぬか」との御尋だが無理に静座法に限つての事ではない。何でも適當である。反對に言へば、實行せぬ人には凡てが不適當だ。

静座法は生きる爲めの實行だ。生きる爲めには、何者を問はない。實行する事によつて、肉にも靈にも向上がある。体操然り。冷水浴然り。禪然り。自強術然り。仁木式、川合式、伊藤式等の強健術然り、弓術、馬術然り。

偉人の中には、習字を練習する事によつて、肉と靈との擴充を計つた。武士は弓を使ふことによつて自己の向上をはかつた。

教育者は、教育する事によつて自我の伸展を爲すべきである。若し自分のする事によつて、自分の健康衰へ、思想貧弱となり、感情偏狭となり、人格の進展を見ないならば、それは、その仕事に没頭して居らぬ証據である。

自己を伸ばすものは、何でもよい。問題は實行にある。君は君が實行し得るものを選びよ。僕は僕のために静座法を實行してゐるのだ。

三、静座法の研究法？。前にも言つたやうに静座法は、生の實現のために爲すべ

きものである。故に頭で考ふべきもの——研究すべきものでなく、實現して体得すべきものである。

もし、何者をも、理解で解決が付かねば得心の行かない人には、何時が來ても堂に入る事は出來まい。先づ四五年黙つて實行したならば、自ら氷解するであらう。

そうすると。自分の健康も自覺出来るし、人の幼稚なものも判然として來るし、恐ろしい程自分の貧弱な事も明瞭になつて來る。若し君が實行するならば、理屈も言はずに、四五年實行して体得するより外に道はない。

3、煩悶せるB女先生に

そんな、弱々しい事言つてゐては、駄目です。大に氣焰をあげて活動なさい。

其處に生は伸びます。

茲に私が代つて呻りませう。私は常にかくあるべきものだと信じてゐます。

「私は女である」

「そして人間である」

同じ人間が、女と言ふ名稱のために、傳統的に、偏狹的に、周圍から壓迫と束縛とを加へて満足してゐる男も之を丸呑にしてゐる平氣な女も、無理解な不徹底な思想の罪である。

男に生るゝも、女に生まるゝも、之は自然の配劑である。それ／＼獨立であつて自由な天地に住むべきものである。勿論無定見な平等であつてはならぬが。

男は男としてあくまで忠實であり、女は女としてあくまで忠實であればよい。それを間違つて、女は男より弱いものと見縊つてゐる。そして壓迫を加へてゐる

男も女も、それ／＼自由な天地があつて、他から絶対に犯す事の出来ないものである。男たちは、直ちに、言ふであらう。「元來女は無活動の表徴だ」と。それはその位置に置いたからだ。現在の日本の生産は、誰れの手によつて爲されつつあるか。もし、日本全体の女が、男の考へた會社を嫌つて同盟罷業したら、生産はごうだ。之を思ふと、思想と事實とは反してゐるではないか。一日も早く、筋肉労働は男の領分だとの、誤つた頭を改めて貰ひたい。

尙言ふべきは、思想である。女は男の思想の裏にかくれたるものであると。之は誠に心得ぬ錯誤だ。眞に自由に生き解放に伸びつゝある婦人思想家を見るがよい。男子をして辟易せしめてゐるではないか。先年開かれた全國女教員大會に顧みよ。居並ぶ大家をして、その意氣と思想に驚歎せしめたではないか。日常の思想活動にもこれ以上の點は敢て尠くない。

男も女も、立派な人格者である。肉的にも靈的にも、彼に強く、是に弱い點を見出す事は出来ない。全く自由の天地に於ける活動は平等である。

男は男の思想に生き、女は女の思想に生き、女は女の肉に生き、男は男の肉に生きればよい。個性の發揮だ。それは自我の實現だ。

「弱きものよ。汝の名は女なり」大昔の事だ男も女も眞實の自己表現より外ない。眞實の表現が、女が弱いのなら男も弱いのだ。男が強いのなら女も強いと言ふより外ない。女にもそれだけの意氣と表現の力を持つてゐる筈だ。

以上の如く考へる事は不當とは思はない。男の方も免さるゝでせう。若し疑問があるならば、暫く「自由解放の天地」を與へよ。女の組織する會合然り。學校然り。かくして各方面にその思想、その勞働を表現せしめよ。

其處に必ず、女の或物を見出す事が出来るであらう。

之は男子を恐れての爲めではない。只現在の空氣を怖れるからである。女子としての眞價値の發揮が出来ない社會を怖れてである。

相互に價値を認めらる時季が到來したならば、其時こそ眞に男と女と相倚り相扶け、男は男に生き女は女に生きる事ができるのである。

||大正二年二月中旬

箸藏山の麓の寓居にて||

◆家庭教育の改造

彼は、家庭の人となつて、學校教育の基調はいよゝゝ家庭教育にある事に想倒した。而して、今日の家庭教育は、大に改造せねばならぬ事を知つた。

1

急轉直下に、改造の聲が、凡ての隅々まで波及進展して行つた。併し餘り突飛

小學校長のころ

的、皮想的、輕舉的、雷同的のものが尠くない。

彼教育者は、常に、實際的に、真面目に、實行的に、問題を究明して、それを實現したいと考へてゐる。

2

近時教育は餘程の發展を見た。それは、おもに學校教育であつて、家庭教育、社會教育は、いまだ満足が出来ない。

殊に今日、學校教育に對して、餘程の制限を受けてゐるものは、「家庭教育不振の爲」と言ふ事である。

從來より家庭教育が、どれだけ發展して來たであらうか。學校教育の進暢に比較すれば、思ひ半に過ぐるであらう。

學校教育に於ては、近時、兒童の心性を根據として、教育の目的、手段を考究

されてゐる。翻つて、家庭を觀察するときには甚心細い。大抵は両親が、現在の自己の心理を根本としてゐる。

勿論、中には、望ましい聲も聞こえる。

「なるべく、のんびりしたい」と。併し、愛に溺れた場合が多い。「身体だけは健康に成長したい」と。往々指導の能力なきもの、申譯の場合が尠くない。「上級の學校へ是非入れてやりたい」と。之も、兒童そのものを考へない單なる名譽心かられてゐる場合を發見する。

家庭教育は、両親として、大體の方針は樹立してゐる様ではあるが、實は、我まゝ勝手に自然に放任して、眞に兒童の個性に立つた具体案を持つてゐるものはないと言つてよい。

3

國家の伸暢、國運の發展は、全民衆の教育的武裝にあると言ひたい。此國家的舉家一致の家庭教育の振興、家庭學校教育の擁護によつて眞の兒童教育が行はれる。

家庭教育の必要は、單に兒童の二重生活を恐怖するばかりではない。家庭は人間本性の發現の場所であるからである。此家庭教育が眞に濃厚になつて來れば學校教育の効果は累加されて行くべき筈である。

家庭教育不振の爲めに、學校教育が甚しく阻害されてゐる事は、教育當事者が常に痛感してゐる處である。

或人が、兒童は乗客で、學校は人力車である。教師は先引であり、父兄は後押しである。千古の名言である。かくてこそ眞の教育の徹底を期する事が出来る。實に教育は、教師と父兄との協同に待たねばならぬ。

4

「家庭」とは、學問的に、論理的に究明するならば、頗る難解であらう。茲では通俗的に、常識的に考察する

家庭とは、親子兄弟が睦しく、協同して生活してゐる場處である。橋の下、御堂の椽、破れかゝつた小屋、其處に、水入らずに、親子夫婦が、精神的に融合して寢食を共にしてゐるならば、それは立派な家庭が作られてゐるものと言つてよい彼の如く、只親子と米櫃鍋釜だけが、我物の生活でも、貴い家庭だと、彼は自信してゐる。之と反對に、金殿玉樓、出づるに自働車あり、入りては酒肴の山海の珍味ありとても、室の空氣が、精神的に冷却してゐるならば、それは家庭と言ふ事は出来ない。

家庭とは、何處までも、親子兄弟打揃つて笑顔の内に、精神的、理想的結合で

あつて、一の中樞によつて統一されたるものを指して言ふべきであらう。敢て金殿玉樓を羨望するに足りない。却つて「竹の柱に萱の屋根手鍋さげても」と言ふ處に家庭としての眞の表現のある事を忘れてはならない。

5

一体、小兒は家庭の花である。父母の幹枝である小兒は、それに咲きし爛漫たる美花である。そして眞、善、美を發揮してゐる。如何に無愛敬な、鬚親爺でも赤子の天使の様な微笑に接しては、顔面筋の微動しないものはない。一日の心勞も草花によつて勞せらるゝ場合が尠くない。況して將來大なる創造を爲すべき人間の、いき／＼した萌芽に接して快感を起さぬものはあるまい。殊に小兒それ自身は美感と崇高な感じを刺戟する或物を享有してゐる。

實に小兒は、天真爛漫たる無邪氣なる、一種の魔術者であると言つてよい。實

に小兒は、家庭をして美化せしむる、大なる偉力の所有者である。

然るに、此美花がいつの間にか萎縮して行く事である。將來教師の困る、強情な、無情な、喧嘩好きな、無性な兒童が醸成される事である。

之は言ふ迄もなく、無定見な、非具案的な、非教育的な動作や、習慣が、段々と性の奥底まで喰ひ入つて、いつ迄も美しかるべき家庭の華が、次第に浸蝕されて行つた結果に外ならない。

6

家庭は、温かき愛の手一つによつて、創り上げられつゝある。故に善美なる人間の生れ出づべき筈である。それが徹底しない爲め、醜き花と化してしまふことが尠くない。

誠に、一生の理想生活の根源は、母の胎内にゐる時より、先天的に根ざしてゐ

る。その後、生活する事によつて、その先天的自我の内容が充實成長して眞の人間としての活動をするものである。然るに此貴重なる本性の萌芽が家庭教育の無謀によつて摘み取られるのは甚遺憾な事である。

7

教育とは、人の本性を充分に發現せしむる事にある。

之が往々誤解されて、人生に必要な知識を授與する事だとせられてゐた。

人間の本性をして、益々向上せしむる爲め、學力を養ふ爲めには知識が必要でありませう。しかし、一部の人の考の様に、知識のみ多く得たからと言つても、それが教育の目的に到達したものととは言へない。

往々誤つた方針によつて、「教育は學校に一任すればよい」との斷定のもとに、家庭教育を爲すものが多い。又「家庭に於て、學校教育擁護の爲に、知識の注入」に

のみ努力する家庭もある。

こは誤謬も甚しいもので、今日の教育の根本を破壊するものである。

8

教育者とは、月額三十圓位頂いて、腰辨で青くなつて、聲をからして呻つてゐる學校教師ばかりではありませんまい。

眞の教育者とは、學校教師は勿論、父母兄弟、一般民衆、尙擴大しては、山川草木凡て、一として教育者たらざるものはない。彼は、常に、大計畫の學校教育よりも、無意識の教育の如何に肝要なるかを主張するものである。それだけ學校教育よりも、家庭教育を重んずるものである。

無意識の教育（無意識とは、兒童その者を言ふ意ではなく、教育者の側の態度を指したものである）には、模倣性と被暗示性が唯一のものである。兒童は尤も

此點に富んでゐる。もし家庭に於ける父母が、此點に想倒しないで行動するならば、兒童の本性に潤霑し、學校教育に於て如何に努力するも、方向變換し得ない盤根が築かれるものである。實に教育の消長は、家庭教育にあると言つても敢て誤りではない。

之だけの目醒めが、父兄にないならば、最早日本の教育は、行き詰まれりと言つてよい。今後に於ける、教育改造の根本問題は、家庭教育の改造にある。

9

家庭教育改造を双肩に擔ふべき人は誰か。その主任者は家庭の主婦である。

今日婦人解放の運動が頗る盛となつて來た。大に婦人の思想を高め、地位の向上をはかる事は、今日の國家として緊急な事である。それが爲めには、婦人の本性に立つて、眞に表現すべき事に着眼し、健實に、周到に、眞面目に、理想的に

自覺的に、實現せねばならぬ。

その第一歩は、家庭教育の改造に努力する事であると思ふ。これは日本全婦人の自覺蹶起を要する問題である。

10

一体、兒童の教育を學校任せにして知らぬ顔してゐる家庭教育不振の原因は、各種の方面から考察せねばならぬが、彼は、常に次の三つを以て重要な物とした。

一、小兒に對する眞の愛

二、先天的能力に對する不見解と具体的方案の不確定

三、心理學、生理學の知識の不足

第一、婦人の眞實の愛の理解と、之を決行するだけの勇氣に乏しい事である。

子供の可愛のは、敢て燒野の雉子、夜の鶴ばかりではない。人としてはより以上である。此親子を連結する愛の手綱の運用の正否によつて、其處に教育の眞實に接觸するか否かの差別が生ずるのである。

なほ、愛は、その本質として、之に溺れ易いのが常である。而して、その愛を客觀的に考察する事は實に困難である。

かく、愛そのものは、之に溺れ易き性質を有するとしても、その矛盾したる愛は眞に子供を愛する爲めに全部放棄せねばならぬ。之を全部放棄し得る人によつてのみ教育は成立し充實する。

小供をして、眞の人間に作り立てる爲には、小兒の苦痛も敢て辞さない鍛練が大に必要である。

11

眞の愛情とは、一時的な低級な、小兒の歡喜する愛ではなく、小兒が現在及將來とも、眞の人間として、利己的自己を棄て、理想的實現に生きる事の出来る様育て上げる事である。

之は容易のものではない。だから責任のがれとして、學校任せとなる。けれども、兒童を思ひ、國家を思ふときには、飽くまで、眞の愛によつて、その成長をはからねばならぬ。

12

次に小兒の先天的能力の見解なきと、之に對する具案的方法の確立せない事である。

小兒は、夫々先天的に將來發展すべく、伸長すべく、到達すべく大なるあるものを持つて生れてゐる。而して夫等は、一人／＼異つた道を歩むべく發現の能力を持つてゐる。之が適當に培はれ、養はれ、育てられて眞の生の發暢が出来るのである。若し小兒自身の歩むべき道に、之を指導しなかつたなら、それは徒勞であり、小供を損ふものである。

子を知るものは、親に若かないとは言ふものゝ、皮想的な、部分的な、直覺的な獨斷的な場合が少くない。又眞實に知り得たとしても、之を活躍せしむべき方法が妥當を得なかつたり、不徹底であつたり、眞に人間性の發現に活力を與へてゐない場合が尠くない。

之でござうして將來社會を創造すべき人間が作られよう。今後は、飽くまで、小兒の歩むべき道を探求しその道案内者となる事が家庭教育の務である。

次には一般に心理學生理學の知識の乏しい事である。子女をして眞の人間の生活を営ましむる爲めには、對象者たる子女の身心の發達の狀態の知悉する事である。

子女の身心の發達に對して徹底的に知悉せんには、兒童學生理學の知識に據らねばならぬ。今日一般家庭教育が、此根柢に立つて行はれてゐるか否、敢て説明を要しない。

凡て兒童の本性を發現さす爲めには、具體的計畫にしろ、無意識的影響にしろ又、是等の考察にしろ、小兒の心理、生理の上に立脚し解決せねばならぬ。然るに今日往々實現されてゐる計畫や、日常の事實や、暗示性を持つ人の行動を見る

と戦慄せざるを得ない。

家庭教育者が、大人自己の過去の経験や現在の自己の心理生理を以て、小兒の凡てを律して、眞の子女の心理にふれてゐない場合が普通事として行はれてゐる。其結果兒童の本性を阻害し、萎縮せしめ、停止せしめ、遂に執拗者となり自暴自棄者となりて、薄弱な消極的な人間となり終る。

將來家庭教育の任に當るものには、一般的に普汎的に、心理生理の知識の普及を計り、又研究に心がけしめ、兒童教育の根柢を樹立し、眞の創造の人間を作る事に努力せなければならぬ。

最後に努力すべき事は、家庭生活の特徴を發揮する事である。

家庭は、教育の根本的場所であり。國家興廢の第一歩の場所である。而して家庭は學校の企及し得ざる長所を有してゐる。之を意識し、之を發揮する事に努力する事は、やがて家庭教育の改造をなす事である。左にその努力すべき點を列記すれば

一、家庭に於ては、父母は眞の愛を以て教育し、子女は自己の全生命をあげて父母を敬する處、實に敬愛の融合、二にして一体となり、眞に血流の交感する處靈と靈との感應する處、之は外に見出す事ができない。

家庭教育は飽くまで此美點を發揮する事に努力せねばならない。

二、父母を尊敬する事は、既に先天的に刻まれてゐる。其處に服従が生ずる。其仰慕と畏敬。服従と犠牲とは、是亦他に見出す事が出来ない美點である。この點を發揮さす事が肝要である。然るに往々兩親を侮蔑し、反抗し、家庭に分裂の

生ずる事は、家庭に於て父母が眞實表現を爲さざるによる。

三、家庭教育の尤も徹底する事は、兒童の特質を知り養育し永き間共に起臥し共に飲食し、艱苦を共にするによる。故に家庭教育に於ては、各自の特性に應じたる教育を施し、長き生活により精神的交際により良感化を與へねばならぬ。單に不良の方面のみを觀察し。叱責し、以て萎縮せしめ、又長者の缺點短所を觀察するの機會を與へ、威嚴を損する様な事があつてはならぬ。

〓大正三年九月上旬

職員室にて〓

◆親の爲か。子の爲めか。

彼は子の親となつた。子女の教養は、親の爲めか、子の爲めか、第一に考へさゝれた問題である。

[一]

親として子の成長を楽しみ、その教養に努力してゐるのは誰の爲めか。

現在までの思想の傾向を全班的に眺めて見るならば、「親中心主義」でも言ふべきものが大部分を占めてゐる。

1、親は子に對して絶対權を有するものだとなすもの

イ身体に少々傷がつく位は擲らうと蹴ようとする親の當然の權利に屬するとするもの

ロ精神上壓迫を加へ、親の權利で親の思想を注ぎ込もうとするもの

ハ親の意志によつて、教育、養育、愛を左右せんとするもの

2、親は、將來に於て子女よりの報酬を目的として教養に努力するもの

この傾向は相當に一般に浸潤してゐる。

〔二〕

彼は子女を教養する上に、絶對權を振り廻す事の肯定ができない。

子女を教養する事は、彼の一部を伸暢さす事である。彼を引き伸した子女の個性を展開さす事である。さうする事によつて、親に對しては孝となり、子に對しては愛となり君に對しては忠となる。敢て説明を要しない。

子女は子女自身として生命と價值とを有してゐる。子女は一個の人格であつて創造性の寶珠を有してゐる。彼は、唯々此子女の天稟を伸ばしてやればよい。それが彼としての教養の任務である。

故に彼は、飽くまで、子女の個性を伸展せしむる事であつて、子女の身体にも

精神にも、親としての絶對權利を持つてゐるものではない。

〔三〕

今日は人と人との關係がだん／＼緊密になつて來てゐる。だから個性發揮と言つても利己的個性の發揮ではない。人格的個性を伸ばす事によつて、家庭、社會國家、世界の爲めに努力することである。

かゝる複雑なる秋に於て、猶親が子女を教養する事は、親自身の將來の保證のためと言ふが如き、時代錯誤の思想は、速に徹廢せねばならぬ。故に子女を叱責したり賞讃する一言一句にも、子女をしてよりよき將來の向上發展を祝福し、社會へ、國家へ、さては世界へ、如何程まで貢獻し得るかの的がハツキリしてゐなければならぬ。

[四]

結局、親が子女を教養すると言ふ事は、「子女中心主義」でなければならぬ、經濟の都合や老後報酬などの爲めになつてはならぬ。唯々子女の爲めに、その個性の伸暢をはかつてやればよい。彼がさうする事はやがて家庭、社會、國家、世界の進展に對しての貢献である。

かくて彼は子女に對して、六つの的を考へた。

- 1、子女の天稟の能力を發揮せよ。
- 2、子女の人格を認め、生長するに従ひ、干涉を尠くし獨立せしめよ。
- 3、權力を以て身体及精神上に壓迫を加へな。
- 4、教育費の捻出によつて、續く限り教育せよ。

5、子女の計畫は、充分に尊重せよ。

6、祖先の意志をつがすばかりでなく、その個性を發揮せしめよ。

||大正四年三月上旬

職員室にて||

◆ 萌ゆ出でよ女教師

1

女教師に對して、一時批難の聲が喧しくなつた事があつた。その結果であらうか。女教師を志願する人も尠くなり、之を採用する學校も減つて來た。

ところが近頃になつては、女教師に對する單なる風評位でなく眞に之を批判して、論議して、研究の上從來の聲に對して却つて反對の氣勢を揚げて、之を擁護

し成長せしむるために種々の手段を講ずるやうになつた。

従つて、反對に女教師の員數が漸次増加して活躍する様になつた。今後益々女教師の活動方面が展開されるであらうと想像される。

之によつて女教師の位置が向上して來るし、心身の緊張が自由となつて來る。教育のために喜ばしい事である。

2

この様に女教師の地位の向上と擁護伸張運動の盛になつて來た以上は、第一女教師その人の自覺を促進せねばなるまい。でなかつたら此運動も花火的に終らざるを得ない事になるであらう。それは誠に惜しい事である。

勿論この事については單に女教師のみの自覺では、眞の効は奏せない。爲政者

も、男教師も俱に共に目覺めねばならない問題である。

今日女教師の員數の多くなつた事に對して、女教師の中にも男教師の中にも、一時的の彌縫策のためだと眺めてゐるものがある。又之を單に國家の經濟關係より、供給關係より斷定せうとするものがある。それは誤れるの甚だしきものであらう

3

員數の増加は色々に見る事ができよう。第一は、女子職業の範圍の擴張の社會進歩現象と見るが穩當であらう。

爲政者に、男教師に、一般民衆に、穴埋めだの、彌縫策だの、經濟上だのと傳統的な思想が少しでもあつては、女教師は伸展がない。活躍がない。

殊に女教師に於て、自己の生活の意義に對する思索にも耽らず、侮蔑を甘じて

受ける様では情ない。

自己の生活に對し根柢に深甚なる自覺と奮起が欲しい。

4

女教師が、自己の生活に向つて、それが自己の天職であるとの自覺を持つて貰ひたい。そして「女教師は凡てその日暮しだ」この暴言に對して反對の証據物件を提供して貰ひたい。

教育者は、その職にある間は、必ず此根柢の上に活動して行くと言ふ事がなければならぬ。人は之を我天職だ又使命だ。自覺し自信して立つ處に、渾身の力が顯れて来る。かくて始めて一切の事項を抛つて、凡ての他の何事にも顧慮する事なく、自己の使命に向つて慕進する事が出来る。其處には自己の全生命の貢献

か出來て、眞に生の喜びを、かちうるものである。

茲に謂ふ使命とは、仕事と言ふ事ではない。自己の人格を開展さして行つて、社會と人類との發達のために貢献するべく自己の表現をはかる事である。人たるの使命をはたす事である。

職業につく事は、何も自己が食ふためではない。之によつて眞に生きて自己の無限の課題を果たす事である。職業を通して自己の成長をはかり社會の文化に貢献する事である。

5

従來は女子の能力を發揮するの環境に置かれなかつた。むしろ壓迫し勝ちであつた。伸びるべき若芽もむごたらしゆう壓されるか、甚しいのは摘みとられてゐた

女子は生後直ちに、内的活動の位置を授與されて訓練づけられた。之が永世の遺傳となりその素質の上に、更に教育の範圍は極限され、且つ活社會の表面に立つて活動すべき機會を割愛されずに経過して來たのである。

其後稍教育の場所は、廣汎となり活躍の地位は授與された。けれ共飽くまで開展活動するだけの思想の自由と時間の猶豫は與へられなかつた。

6

外社會に活動しながら窮屈なる思想の壓迫と、内家庭活動に疲勞せざるを得なかつたのである。

折角活動の位置は與へられたが、まだ思想の自由と、時間の猶豫を與へられなかつた爲めにそれだけの要求には應ずる事が出来なかつた。しかも鞭ち、はては侮蔑し壓迫しその價值も疑つた。誠に矛盾だ。駿馬をつないでにおいて、之を鞭ち

その足跡が或範圍より出でない事を呪ふと等しい。

今後は女教師にも思想の自由を叫ばしむる事である。その機會を與へる事である。むしろ女教師自らが作るべきである。

次には二重生活を徹廢せなければならぬ。

社會に立つて活躍を爲し自己の表現をはかり内に入りては一室に閉ち籠つて人格の修養をなし、偉大なる感化性を發揮せしめねばならぬ。

外では教育者として活動し、内では全く教育者より離れて勞働者となる様では眞の徹底は得られない。

飽くまで一元に立つて自己の修養をはかると共に環境へ向つてより以上の貢獻をなさねばならない。

二重生活を徹廢する事によつて、よりよく生きて行くであらう。

7

思想の自由も、研究修養の時間も與へられたとするならば、之以上は女教師自身が自己の根柢を培養せねばならぬ。

その根柢の培養は無爲にしては得られないであらう。新しい思想の吸入批判消化にも骨が折れませう。人を動かすだけの力も積まねばなるまい。自分の思想技能を信じて呉れるだけの方法も体験せねばならない。容易の事ではない。自分の力で自分の生活を堅實に築き上げて行く用意と努力がいる。

8

女教師の今頃の生活には、大なる煩悶苦惱がある。之から自憤、努力を繰り返す事によつて貴重な結晶が生れるであらう。その時季の一日も早からん事を女教

師のためにも教育のためにも望んで止まない。

最後に言つて見たい事は、女教師と雖も結局は良妻賢母であらねばならぬ。けれど其時季が来るからと言ふので現在の生活に眞實でないやうでは誠に心細い。

處女時代も賢母時代も教育者である間はその使命を自覺してその道に生きねばならぬ。

さうする事によつて、従來の「其日暮し」と言ふ語は、「眞の表現に眞の價值を生む」に換るであらう。

今後社會は益複雑となつて來て、女子の社會活動範圍が擴張されて來るであらう。そして教育の大部分は女教師の手によつて爲される事であらう。さう信ずるごうか此秋に當つて發憤と努力を希望したい。

|| 大正六年六月中旬

吉野川のはざりにて||

小學校長のころ

◆傳 波 録 [二]

[一] 彼の書いたものを批評して呉れた先生へ

1

「眞實の精神生活の爲めの物質的要求」に對する御批評、衷心より感謝します。御賛成下さつた點、熟考を促し下さつた點、一々繰り返して讀みました。大に参考となりました。

けれ共、彼には彼の天地があります。細いなりに、曲りなりに、よし色は鮮か
でなくとも、人目を惹くだけのものでもなくとも、時が來れば、芽も出し、丈も伸
び、花も開きます。

同じ形の種子を撰んで蒔いたとしても、一個一個の異つた花を開くではあり
ませんか。止むを得ないでせう。それは自然ですから。またその個に立つ事に於
て眞に價値があるのでせう。

彼には彼の思想があります。生活があります。この獨自性の練磨、創造、之が
人間の目標でありますまいか。

2

彼は、今、拙いながらも慥かに食ふて居ります。破れながらも慥かに着て居り
ます。人に物を乞はなくとも、金を借りなくとも生きてゐます。

併し生活してゐるか否は、反省して戰慄を覺わます。そして一般民衆がどれだ
けの生活をしてゐるかに眼を轉じますと、いよ／＼恐怖して來ます。彼は眞面目

にならざるを得ませぬ。之は小さい個人問題ではありません。廣い社會問題だと考へます。

誤つて貰つてはなりません。生活には、金を山程積んで、食ひたいものを食ひ、着たいものを着て、そして人間の權威までも、金で左右しようとする様な生活振りの満足の謂ではありません。その様な生活振りが出来る時が來たとき、どうするかは、言ふさへいやな氣がします。

今の彼は、何事を措いても、物質の中へ全我を投げ込む程に、生活を遊戯視してはゐません。彼は眞の生活に生きたいと始終苦惱してゐます。煩悶してゐます。彼には、眞の生活に對する大なる憧憬と焦燥があります。彼の論文を生み出した所以も、其處に胚胎してゐます。

人間の生活とは低級なものでありますまい。高貴な、而かも尤も複雑なものでせう。人間の生活が俗に謂ふ、「命をつなぐ」にあると思つてゐる方には何も言ひますまい。そんな獸性に引きづられてゐては人間の使命が何處にあります。

人間の生活が、毎日營々と自己の命をつなぐ事に没頭してゐる犬猫の様では、人間社會の進化が何處に生まれませう。けれ共そこらには、かなり尠くない事を悲しみます。彼の書いたものも、或は、色眼鏡で見られたかも知れません。

勿論、人間にも、衣食住に對する慾望はあります。之あるが爲めに人間に發展のある事も認めます。

生命を保つために、飢ゑざるだけの食物をとり、寒暑に應ずるために、着る事

を他處にする事は出来ません。それには、相當の財源を捻出し、夫れを得るために相當の活動をします。

それが果して生活でせうか。或學者が、それは生存だと言はれてゐます。生存と言ふ概念の内包を詮議する事は別として、それが眞に生活してゐるものでないと、彼は斷言します。

4

彼は彼の言ふ生活の一部は、出来てゐるでせう。併し彼は、そんな生活の一部分では満足は出来ません。

彼は衣食住の満足の外に、知識慾の満足を要求します。此知識慾の満足が加はらない生活は、生活として極めて範圍の狭いものでせう。此満足には相當の資料

と努力を要します。生活に苦惱がある譯です。

なほ人は、知識の慾求の外に、倫理、道德に對する要求願望があります。之を他處にしては、人類の發展はありますまい。人間の價值、高價な所以は、茲にあるのでせう。

此慾求を満足さす爲めには、よりよき資料とより深き奮闘を要します。人生に惱みのあるのは、茲でせう。茲が人生に戦ひのある所以でせう。それは悲しいものではありません。苦惱の後、戦闘の後の歡喜を獲得しようとする處に眞の生活が存在するからでせう。

5

けれ共まだ、それだけでは、生活の全体とは言へないでせう。眞の生活には、

藝術的要求を満足せしめねばならないです。彼は之が生活の最高權威のものと思つてゐます。併し低級なものや、特殊なものを指すのではなく、彼の謂ふ藝術的生活とは、その生活になり切ると言ふ事です。平凡に言へば生活の眞實に生きる言ふ事である。又は徹底したる生活をすると言ふ事であります。

此満足を得る爲めには、最高の資料を要し、最善の戦ひを嘗め、最遠の時日に待たなければなりません。さうする事によつて、始めて生活と言ふ名辭を冠らす事が出来ます。

之は彼の發見でも創作でもありません。幾萬年前から、全人類の綜合的願望でせう。いや／＼未來永却の眞實の叫びでせう。活動の源泉でせう。其處まで彼は到達したい又到達せしめるべく努めなければならぬ。それだけの使命と天職を持つて生れて來てゐます。

彼は資料を得るために努力してゐます。其處まで徹底して下さつての御批評とは呉々も承知はいたしました。

6

果して、かゝる調和的満足が得られるでありませうか。幾万年の間に於て、この願望を満足さす事が出來たでせうか。將來に於て果して満足さす事が出來ませうか。御疑尤です。彼は、人類の生命の續く限り到底、満足さす事の出來ないものと斷言します——その最高は。

然らば、それは空想的な、望外なものとの御批評は覺悟です。そこが創造的の生命です。價值です。瘦せたりとも彼としての思索です。色は淡くとも彼の花です。個は何處までも高價です。

人類は、理想に生きています。而して、其理想は、固定的のものではありません。一秒毎に進展します。理想が理想を創造します。理想に到達したと思つた時には既により新しきより高き理想が創造されてゐます。

もし人間の理想が固定してゐると假定して、生活の欲求の満足が獲得されたとするならば、人類の今日迄の進展の間に於て、或時季を以て發展が停止されたであらう。併し幾万年の今日まで、又人類の續く限りの今後に於て、よりよき満足を獲んとして努力してゐる處に人類の發展があるのでせう。

7

あなたは、あなたに生き、彼は彼に生きています。

彼は貧乏な底に住んでゐます。けれ共生活の核心は確かにつかんでゐる積りです

世間の人が食ふ事や、着る事に騒いでゐても、彼の核心は、一向動揺しません。たとへあの論文を如何に解されても、彼の核心には、生活の自由と、生活の喜びとを人知れず、靜かに味得してゐます。衷心のある處をお察し下さい。

人間味に生きてゐるA教育團の各位へ

1

「あの釜。あの鍋。あの壺。あの壇。あの會場の空氣」。それはく、近頃の干乾びた彼の人間味を甦らしめた。

彼は、心行くまで味得した。あの壇の中の液体よりも赤い血。釜の中の液体よりも甘い涙。この血涙の交換。之が人間の根源だ。

各位は非常に幸福だ。之でこそ町村の兒童の福祉は進展する。國家の福利は増進する。彼は、深いそして廣い或物を獲得した。あの下から、ムク／＼と湧き立つて來る純白な麥酒の泡以上に。

2

主腦者たるものは、凡てのものを、同化せなければ止まないだけのあるものを体得して居なければならぬ。此意味に於て、校長は放射線の主体である。それによつて、職員、兒童、一般を校長化する。そこに統一ある有機的の能率の高い、而かも眞實に生きた人間味の潤澤な教育が出来る。之を眼前に見せつけられて、日頃の私の閃きに大なる力を得た。

3

教育とは、靈妙なる進展性を有する獨自性と、崇高なる人格者とが接觸して、其處に靈的感應が行はれ、不知不識の内に、進展向上せしむる靈的事業である。だから教育の第一義は、教師の眞實の表現である。換言すれば自己を絶えず開拓する事に奮闘努力してゐる人である。

その精神的靈動にふれて感激して融和鑄成される。其總量は、その教師の價値に比例する。結局教育とは、教師が自己を開拓する事に歸着する。

各位の自己開拓の熱烈なる態度に驚異の眼を睥いた彼は、各位は眞實の教育者だと肯定した。

4

彼は、大計畫な、そして形式的の教育は、嫌ひな男だ。不言の間に無意識の而

かも刹那々々の教育が好きだ。之が眞の人間育の極致だと思つてゐる。教育は、口説の業ではない。表面の事實ではない。内面と内面との、計畫せざる人間性の表現より湧出したる靈光の傳波に共鳴して、靈動したるものでなければならぬ。神性を持つ兒童に對する各位の言行を見て、特に彼の意を強くした。

5

天の一角に曉鐘は鳴り響いて居る。お互に自己をより深く掘り下げて行きませう。赤い血、甘い涙の人間味の溢れる域に進展せしめて行きませう。

その、教師の赤い靈火で、眞純な兒童の肺腑に靈光を移さねばならない。彼と各位とは、この貴重にして、而かも神秘的靈的作業に生活してゐる。より人間的に、より神性的に、而かも共率的發展生活をして行かうではありませんか。之を御縁に。

〔三〕 新しく校長となつた先生へ、

1

子牛を牽いて行くのを見る。伯勞が先に立つて、威張りながら引き張る。引張れば引張るだけ子牛も、全力をあげて反抗してあとへよる。可笑しいのは、伯勞があとへ廻つて、彼れの自由に任かすと、コソ／＼と歩み出して、自己の力に續く限り進んで行く。

人間も此子牛に似た處があるのではあるまいか。人間も此獸性の範圍を脱しない處があるのではないか。他人が威張つて來れば、之に反抗して一層威張つて見たいものである。

2

一体校長程威張りたいたいものはあるまい——勿論中には神性の方もあるが——そして亦、訓導程、威張られたくないものはあるまい。

併し可笑しいことには、威張られたくなかつた訓導が校長となると、すぐ威張り出す事である。萬物の靈長とは言ひながら、矢張り動物を全く超越したとは言へない。

人間が活動してゐる價値は、獸性を淨化して神性にと進轉さして行く處に光明があるのである。之が吾人の努力である。自己開拓である。

3

校長が威張る程、ますます訓導は威張るものである。それが人間性の表現であ

る。その時、威張らない人は、動物性を没却した干乾びた偶像的に固形化したものか、又は、虚偽に生きたものである。

人間の創造生活は、此獸性を消滅さす事ではなくて、之を純化する事である。其處に眞の人間性に生きる事ができる。

訓導は、よると障ると校長の批評論が始まる。朝會でも遅いと、すぐにらんでゐる。教案を作つてないと、すぐに召喚される。教室へ出掛けに一服吸ふと厭味を言ふ。看護當番をサボつてゐると直に焼きつけられる。丸で一から十まで牛馬を使ふ様だ。其癖校長は、火鉢抱いて、スバ——と煙草を吸ふ事だけが仕事だ。毎日新聞の復習までしてゐる。新しい事を尋ねると、「若い者がしつかり研究して置け」とお茶を濁す。何か學校に仕事をするときには、ソラ委員だとか言つて皆のものに計畫さして實行する。よく出来たら自分の案とし、失敗したら責任を

訓導に負はす。それでも、校長様で吾々の俸給の上前を失敬する。

校長連が集まると、亦、話が派積む。どうも、近時の訓導はするい。萬事責任持つてやらない。責任立ての方法を考へると、又責任のがれを工夫をする。命令した事でも満足に實行しない。校長が常に、頭の中に持つてゐる十分の一の責任を持つてやつてくれれば、學校は發展する。今日の教育の進展しないのも茲に淵源する。職員會には沈黙を守つて、誠實げに見せて、いざ實行となると、口實を設けて履行しない。折々他の職員を煽動して不穩の舉動に出ると。

何れの說にも一面の肯定的分子はふくまれてゐる。

訓導曰く。「校長はよろしく萬事に宏量なれ」「大局に着眼せよ」と。校長曰く「責任感を持つて」「決議は實行せよ」と。而して頻りに慘劇を演じてゐる。

之等の根源は何だ。從來に於ける人間味を没却した教育の罪だ。靈的事業を自

己の天職としてゐる教育者が、眞の内部的眞實に生きない結果だ。神性に近づかんとして活動してゐる衷心的生命を度外視して、單に規則で人を使つて、理論で律して、而して自己が偉いものだと、現れようとする處に、時代錯誤がある。この規則や、理論や、傲慢を超越した偉大なる心靈の表現が校長としての寶珠である。赤い血と、熱い涙とを持つた眞實の而かも徹底した生活の表現が根源である。其處に人は眞の態度となる。神性に立返るのである。

血と涙とは、對者との間の一本の導線を傳つて、相互に活躍さすべく、偉大なる動力を與へる。使ふ人と使はれる人との間には、相互の心情が密着し、融合して異身同心の處に、能率最高の活動の源泉がある。

毎日顔を見合せて、言語を交へ、共に俱に活動しながら、とかく形式に流れ、能率のあがらない、所謂生きた仕事の出来ない、相互に批難し合ふ如きものは、

その源に於て、相互に、剛慢なる態度で立つたり、規則で束縛したり、萬事理知で解決せんとする處の結晶である。赤い血、温い涙の交感、即ち眞實の衷心の交換がないからである。

愛は一切を美化し、靈化し、活動の原動力を生むものである。眞に君と臣、親と子、夫と婦、師と弟、長と部下、個人と一般、等凡て對者關係の場合に於ては愛の結合でなくてはならない。

勿論之を徹底さす爲めには、相當の年月を要する。此長年月の情熱によつて、其處に信仰生れ、生命と生命は、活動の源泉を得て、長く部下が肝膽相照らすに至るのである。

姑の威張る嫁にして従順なものはない。嫁の我まゝに黙して辛抱する姑もない長と部下亦然り。よろしく、内的生活に生き、赤き血と暖かき涙。滴る如き同情、

蜜の如き愛。之こそ人間性の寶珠。そして校長として、部下としての寶珠である君の御榮轉を祝すると共に老婆心を捧げて置く。幸に國家のため自重を乞ふ。

師範首席訓導のころ

◆眞實の精神生活のための物質的要求

彼は物質上に於て非常の迫害を受けた。蓋し此境遇にあるものは、彼のみではなかつた。凡ての教育者は、奈落の底に沈んだ。彼は大に物質的要求の當然なる事を叫んだ。

(1) 教育者は清貧に安んずべきか。

「言ふまいと思へど今日の暑さ哉」。多数の人々によつて教育者の待遇問題は論

せられた。併し彼は「言ふまいと思つて」猶叫ばなければならぬ惱を持つてゐる。

教育者は、飽くまで物質上の願望を放棄して清貧に安んずべきである。衣は寒暑を凌ぎ、食は空腹を癒しさへすれば足れりであり、よろしく、水をのみ、塩をなめ、草を枕として寝ることも、敢て収入の少きをかこちて、活動に表裏があり、或は増俸を要求してはならぬ。

之は嘗つて師範在學時代に守本尊とすべく強要されたものであつた。當時は、彼も眞面目に、その思想を守つてゐた。五圓の下宿料を支拂つて、木綿の紋付羽織で、四圍の哄笑も意とせず、馬車馬的に突進して來たのであつた。

(2) 眞の物質的要求は、眞の精神生活のために當然だ

然るに、教育と言ふ事を、餘程深く解する様になり、人生と言ふ事に味到しか

けた彼は、先づ、師範時代に校長から、卒業後視學から聞かされた訓言に對して先づ懷疑の目をみはらざるを得なかつた。そして煩悶した。苦惱した。

一体教育者は、國家經營の教育の中樞者である。その任の重且大なる事は言ふ迄もない。されば時勢の要求に應じ思想の先駆者となり、宣傳者となり、大に精神活動をなさねばならぬ。教育者は、飽くまで、内的生活に生きねばならぬ。

けれ共教育者の故を以て、物質的欲望を、全然排斥せねばならぬと言ふ根據を見出す事は出来ない。否反對に彼は、何處迄も眞實の精神生活を爲すために物質の要求をせねばならぬ事を主張したい。

精神生活のための物質的要求をせざるものは、それは虚偽の生活に生きてゐるものである。何處迄も眞實の生活を爲し自己の徹底したる表現を爲すためには、物質を要求せねばならぬ。

物質的要求を誤解してはならぬ。之を悪用する事も罪である。春は花に、秋は紅葉に、酒池肉林、金殿玉樓に、美衣金ヒカに、敢て奢侈生活に、虚榮生活に、泡沫生活の爲めであつてはならぬ。

自己開拓のための、自己向上のための、第一義的生活のための物質こそ貴重である。春が来れば老ひたる父母に輕装を、偶には夜櫻の一つも見せたい。秋が来れば錦羅はなくとも、子供には、温かき袷一つも準備して、日曜日には登山なり遠足もさしたい。彼も毎月二三冊の新刊書を讀んで、自己を廣く深く高くしたいかゝる意味に於て彼自身を尊重するが故に敢て眞の物質を要求する。

(3) 今日の教育者は下級生活である。

今日の教育者は、如何なる生活を續けてゐるであらうか。教育者としての形式

は。洋服は。靴は。帽子は。之以上言ふに忍びない。神の子から見たならば、如何に驚異の眼をみはるであらうか。進んで精神的糧は。新刊書籍の購讀に、講習會の出席に、學事視察に。眞に自己を擴充するために、國家の大任を果すに充分であらうか。

且つ、一度び、家庭に病魔の侵入するや、その醫療が完全に盡す事が出来るか中には、あたら貴重の生命を失ひつゝあるものも尠くない。老父母に孝養の不徹底のため、教育者の模範家庭に、往々悲劇を演ずるのを見る。

子女の教育に至りては、猶更手を下すの方法なく、哀れ有爲の少年をして、將來岐路に彷徨せしむるの悲惨事が此聖代の今日、教育者の上に表現されてゐる。

教育者は、全民衆の先駆者先覺者でなくてはならぬ。國家の消長を双肩に擔はなくてはならぬ。それだけ教育者は、自重して眞實の生活をなさねばならぬ。

何處迄も皮想的、虚偽的の生活であつてはならない。

彼は、眞實の生活を爲すため、人生の深所へ突入するために、全生命の精神を教育に融合さすために、物質的要求を敢てせざるを得ない。若し眞の意味に於ける物質的要求を拒絶せよと言ふ人があるならば、それは虚偽の生活を爲せと強迫するものである。國家消長の責を脱せよと勸告するものである。

吾人は、眞實の教育者である。如何にあつても虚偽の生活は出来ない。勿論國家の教育を。教育に對する聖旨を忘却する事は出来ない。故に精神生活を爲すための物質を飽くまで要求したい。

(4) 活眼を開いて教育者の最後を見よ。

現在に於て、以上の要求が満足されなくても、より以上に、精神生活の道があ

つて、現在に於て、將來に於て、吾人の精神開拓と慰安と、理想と光明とを獲得する事ができるならば、吾人は何處迄も此主張を取消して、降伏し、沈黙するであらう。

けれ共、只今の彼は、遺憾ながら、現職中に、また退職後に、安心の國、永住の土を見出す事の出来ないのを、國家教育の爲めに悲しむ。それは何も、吾人が職業的満足を購ひ得ないからではない。國家教育の大興隆の時季が到來せぬからである。

教育者の最後は、誠に慘めである。二十年三十年國家教育のために盡した教育者が、老後に於て、如何なる生活を爲してゐるか。言ふさへ戰慄を覺ゆる。

眞に教育者を献身的ならしむる爲めには、現職に於て、自己開拓を爲し得るだけの物資的資料と機會とを與へ、完全なる第一義的の生活を爲さしめ、老後の不

安を除き、全生命を奉仕して、自己の天職だと、眞に忠實ならしめなければならぬ。

勿論、教育者も大に反省せねばならぬ。單に物質的不安を理由として精神的に怠業してはならぬ。何處までも、眞實に、徹底的に天職を全ふせなければならぬ。

(5) 天より相當の報酬は授與される

前年來襲來した、生活の不安と思想の動搖。之がため受けた影響は蓋し尠くない。之は、教育者の根柢の薄弱な處にある。けれ共國家教育の任にあたるものをして、かゝる時季に於ても、猶よく盤根強き基調に立つ事の出来る様擁護せなければならぬ。

今日の一般は之等に對して相當理解あり自覺ある事と思ふ。一人として今日の教育者の境遇に同情してゐないものはない。

今日の社會は向上し、國家の富は相當に増進した。物質文明の發達した結果、之に従事するもの、生活は向上し、之に職を求むるものは厚き報酬を受けた。

一方精神労働に従事するもの、待遇は、精神文明の物質文明に伴はざりし結果數十歩遅れた。併し之は永久の事實ではなく、過渡期の一時的止むを得ない現象であらう。

彼は、飽くまで、眞實に活動してゐるものに對しては、畢竟、天より之に相當した報酬を授與されて、教育者たる天職を發揮するに遺憾なき精神生活を爲し得るものと信じて疑はないものである。

(6) 考究すべき方策

一日も早く此解決を急ぐ。それは、無理解に對する恨聲ではなく、教育者とし

て一日も早く、眞の精神的生活をしたい叫びである。一日も早く、虚偽の生活から脱出したいからである。

之は個人の爲めではない。今日の教育界は、人材が、他界に吸収されて、衰微頹廢、沈滞に陥りつゝあるを悲しむからである。殘黨の素質が、個性の特色は失せ、思想が枯渴し、眞に兒童を生かし、社會の先驅者となる事が濃厚でないからである。國家に對する憂慮を除きたいからである。何と言つても、教育振興は、教育者にまで歸り行かねばならぬ。

教育者の待遇法は既に先輩諸氏及當局者によつて苦慮詮議されつゝある處である。茲には只その要點のみを揚げたい。

一、教育者の生活の安定を期し、専心其職に努力し與ふだけの待遇をなすべき

こと。